

CORPORATE SOCIAL CSR 報告書 / 2008 RESPONSIBILITY

新たな価値の実現を目指して



ハルナグループ

<http://www.harunabev.co.jp>

目 次

contents

1 C S R取り組みについて

- ① トップメッセージ p 1
- ② 経営基本方針 p 3
- ③ コーポレートガバナンス基本方針 p 3

2 ハルナグループ全体像

- ① ハルナグループ各社紹介 p 4
- ② ハルナグループ会社概要 p 5
- ③ ハルナグループ沿革 p 7
- ④ ハルナグループトピックス p 8

3 ものづくりへの取り組み

- ① 品質への取り組み p 9
 - ② 研究開発への取り組み p 20
 - ③ 商品開発への取り組み p 22
- ～世界各地より選んだナチュラル製品の販売～

4 環境への取り組み

- ① 地域社会貢献 p 24
- ② 環境会計 p 30
- ③ 代表者の社会貢献 p 35
- ④ ペーパーレスの徹底 p 36

5 企業の透明性の向上への取り組み

- ① 株主構成 p 37
- ② 四半期報告会の実施 p 38
- ③ リスク管理体制 p 39

6 社員育成への取り組み

- ① ビジネススクールの開講 p 40
- ② 福利厚生の充実 p 45
- ③ ストックオプション、従業員持株会の導入 p 46

2010年、ハルナグループは新しい舞台に立ちます。“公開企業”として歩み出していきます。これまで、ステークホルダーの方々と様々な局面で利害をともにして頂き企業活動をしてきましたが、今日の経営水準と経営品質を考えるに“公開市場”的舞台は、より高く、より厳しい社会の視線を受けとめられる企業として、組織能力を備えておかなくてはいけません。経済的活動責任を果たしたうえで、社会への配慮を高い位置に据え、内部と外部、いずれの課題をも効果的な業務の推進と成りうる仕組みが重要で、短中長期に亘わらず自社の企業価値向上につながる活動になるべきと考えます。昨今、“CSR”的認識には明らかにパラダイム・シフトが起きていると思われます。企業の中核的課題として“将来の利益を生み出す投資”との認識を持つ企業が増加しております。企業の社会的責任範囲も環境、社会貢献、人権、リスクマネージメントに至る広範囲な社会的活動になっており自社の事業を通じて“払うべきコスト”は“利益を生み出す投資”に転換している現状といえます。

* * *

2007年から、ハルナグループは連結経営へ移行しております。“ハルナ理念・ビジョン”的基で、政策と資本を一体とする“戦略的アライアンス”を目指しています。“集中管理から分散と統合のマネージメント”への転換を図り、“自立と自律”を重んじるグループとして、社会に欠かせない存在になっていきたいものと希望しています。これまで、人材育成を優先課題としてきた歴史がありますが、今年、4周年を迎える“ハルナ・ビジネススクール”での教育実習は、これから企業成長の要として大きな役割をはたして行くものと確信しています。

* * *

2002年、“ハルナ理念・ビジョン”的浸透政策として、最初の実行は“四半期報告会”的開催でした。次は2003年度から“環境会計報告”を開始しました。この報告書を四半期報告に加えることができて、一段と活動の公開性が高められる体制になってきたと思っています。なかでも一番喜ばしい出来事は、一人ひとりの業務の責任の在りかに気づき、そこから学び、自分の仕事への理解を一段と深める機会となってきたことです。

* * *

2010年、グループが入場しようとしている“新しい舞台”的時間まで今日、グループが最も情熱を注いでいるのは、次世代を創る経営層です。“考える集団”層の誕生に期待を描ける意味こそ、“新しい舞台”的夢です。独自性ある“CSR”活動で社会の変革に貢献できる運動になればと、ハルナグループは願っています。

経営基本方針

ハルナグループは
以下の経営方針のもと
企業価値の持続的発展を
目指してまいります。



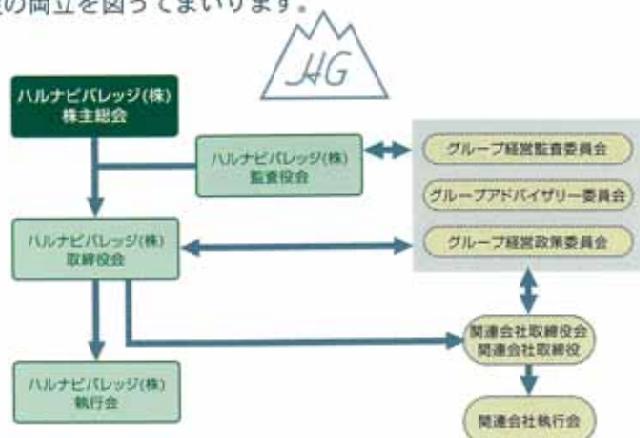
ハルナビパレッジ株式会社
代表取締役社長
小出 信介

- ハルナグループは、ペットボトルに強みを持つ飲料受託の企画・開発、製造、販売、物流のバリューチェーン全体での機能充実を図り、品質を第一に安全・安心に努め、顧客の信頼と満足を高めることを目指します。
- ハルナグループは、人と生態系との共存をテーマに、安全で美味しく、地球環境にやさしい飲料製品づくりを目指します。
- ハルナグループは、グループ各社のシナジーによる連結創造経営へと移行し、グループ全体によるコーポレートブランド価値の最大化を目指します。
- ハルナグループは、企業の透明性向上とコーポレートガバナンスの強化に努め、全てのステークホルダーの皆様から信頼される企業価値を創造することを目指します。
- ハルナグループは、持続的な成長発展と社会への積極的貢献を共に推進し、全てのステークホルダーの皆様から支持される企業価値を創造することを目指します。

コーポレートガバナンス基本方針

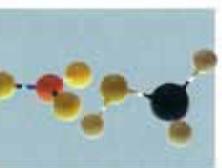
■ハルナグループの経営執行業務組織

ハルナグループは、すべてのステークホルダーの皆様から、「価値ある企業」として支持され続けることが、コーポレートブランド「ハルナグループ」の価値向上につながるとの認識のもと、コーポレートガバナンスの強化および経営の透明性の向上に、積極的に取り組んでおります。グループ全体として、グループ政策委員会、グループ監査委員会およびグループアドバイザリー委員会を設置し、グループ全体のガバナンスの強化と相乗効果の創出を図ってまいります。また、執行体制として、監督機関である取締役会と執行機関である執行会を設置し、監督と執行の分離を図り、業務執行の迅速性と経営判断の慎重性の両立を図ってまいります。



ハルナグループ全体像

ハルナグループ各社紹介

1996年2月 創業	1997年5月 創業	2006年4月 創業	2007年3月 事業開始
ハルナビ(レッジ)(株)  <ul style="list-style-type: none"> ●清涼飲料水の製造 ●販売 ●マーケティング 	(株)ハルナ品質環境研究所  <ul style="list-style-type: none"> ●品質管理 ●環境管理 ●微生物研究 	ハルナエコロジー(株)  <ul style="list-style-type: none"> ●自社開発による飲料製品のマーケティング ●国内販売 ●海外輸出 ●飲料製品の商品企画開発 ●海外製品マーケティング 輸入販売 	ハルナエコロジー付属 ウェルネスサイエンス研究所  <ul style="list-style-type: none"> ●アンチエイジングに関する科学研究

2005年3月 創業	2005年4月 開講	2007年10月 創業	2008年1月 創業	2008年4月 創業
ハルナロジスティクス(株)  <ul style="list-style-type: none"> ●倉庫事業および運送事業 	ビジネススクール  <ul style="list-style-type: none"> ●社内講師による中堅社員及び、管理・監督者を対象とした社内講座の開設 ●大学教授や創業者等の外部講師を招聘した公開講座の開設 	ハルナヨーロッパSA  <ul style="list-style-type: none"> ●EUを中心に茶系飲料及びオリジナル清涼飲料をマーケティング・販売活動 本社フランスパリ 	タニガワビ(レッジ)(株)  <ul style="list-style-type: none"> ●天然水製造販売 ●清涼飲料水製造販売 ●豆乳受託事業 	ハルナインテリジェンスネットワーク(株)  <ul style="list-style-type: none"> ●人事管理 ●財務管理 ●情報管理 ●広報企画

ハルナビバレッジ株式会社 会社概要

商 号 ハルナビバレッジ株式会社

法人設立 1996年2月23日

代 表 者 代表取締役会長 兼 グループCEO 青木 清志

代表取締役社長 小出 信介

代表取締役常務 青木 麻生

所 在 地 本社・工場／群馬県高崎市足門町39-1

TEL:027-372-5875 FAX:027-372-5877

東京本部／東京都中央区日本橋3-5-13 三義ビル5F

TEL:03-3275-0191 FAX:03-3275-0192

管理本部／群馬県北群馬郡榛東村広馬場3044-12

TEL:0279-55-1241 FAX:0279-55-1344

資 本 金 4億2,090万円(発行済株式数8,718株)

売 上 高 114億円(2008年3月末)

事業 内 容 清涼飲料水の製造販売

社員 総 数 145名



お客様 50音順 ※いすれも敬称は省略させていただいております。*****

〈販売先〉

- ・石光商事・伊藤忠商事・岩泉産業開発・えひめ飲料・オアシス・王子製紙・カゴメ・カルピス・黒越化学・コカコーラナショナルビバレッジ・コープネット
- ・小林製薬・キリンビバレッジ・サッポロ飲料・サントリー・JR東日本ウォータービジネス・ジャスティス・セントラルジャパンロジスティクス・双日食料
- ・日本生活協同組合連合会・大丸興業・タマノイ酢・富永貿易・トレッカ・ナカザワコーポレーション・ニチレイフーズ・日本たばこ産業・ハラダ製茶
- ・ブルボン・マルサンアイ・丸紅食糧・三国コカコーラボトリング・ビバック・不二家・ベイシアグループ・ポッカコーポレーション 他

金融機関様 50音順 ※いすれも敬称は省略させていただいております。*****

〈銀行〉

- ・足利銀行・群馬銀行
- ・商工中金・中小企業金融公庫
- ・東京都民銀行・東和銀行
- ・八十二銀行・みずほ銀行
- ・三菱東京UFJ銀行
- ・横浜銀行

〈証券〉

- ・新光証券
- ・大和証券
- ・野村証券
- ・三菱UFJ証券

〈リース〉

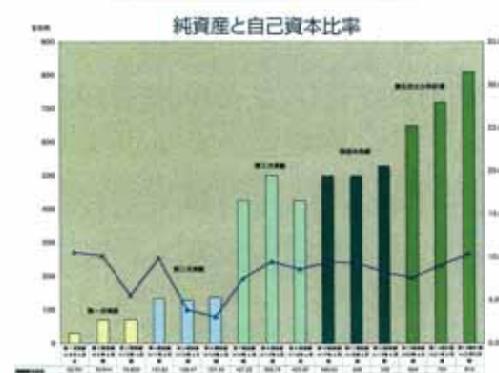
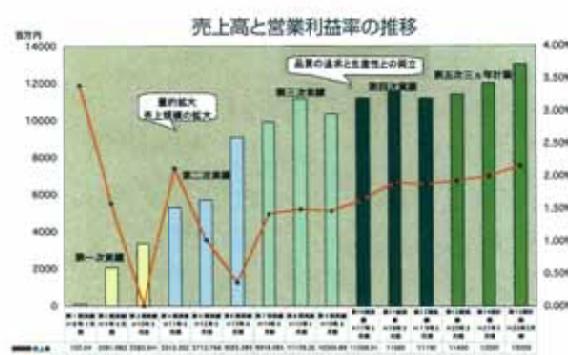
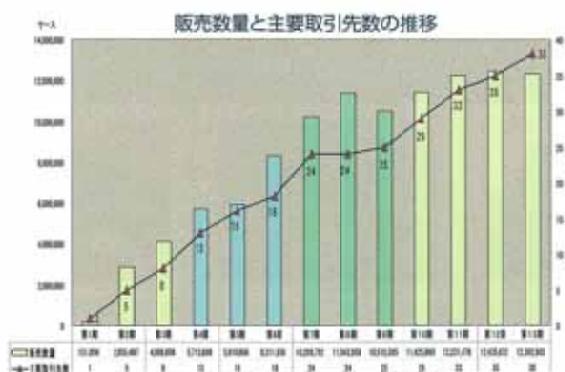
- ・オリックス
- ・ぐんぎんリース
- ・東京リース
- ・東銀リース
- ・東和銀リース
- ・三菱UFJリース

〈ベンチャーキャピタル〉

- ・日本ベンチャーキャピタル
- ・八十二キャピタル
- ・みずほキャピタル
- ・三菱UFJキャピタル

〈顧問〉

- ・内田法律事務所
- ・合同会計
- ・新日本監査法人
- ・南法律事務所
- ・浜四津法律事務所



グループ各社概要

商 号 株式会社ハルナ品質環境研究所
 法人登記 2008年4月1日
 代 表 者 代表取締役社長 苦米地 章
 事 業 内 容 1 総合衛生管理
 2 製造工程管理業務
 3 原料・資材・製品の検査業務
 資 本 金 5,000万円
 売 上 高 1億4千万円(2007年3月末)
 社 員 総 数 24名
 本 社 群馬県北群馬郡棟東村広馬場3044-12
 ハルナビパレッジ
 TEL:(027)372-2700 FAX:(027)372-7046
 タニガワビパレッジ
 TEL:(0278)62-1114 FAX:(0278)62-1144

商 号 ハルナロジスティクス株式会社
 法人登記 2005年3月1日
 代 表 者 代表取締役社長 青木 清志
 資 本 金 5,000万円
 売 上 高 7億3千万円(2008年3月末)
 社 員 総 数 19名
 事 業 内 容 倉庫業務・荷役作業および一般貨物利用運送事業
 群馬県北群馬郡棟東村広馬場3044-12
 本 社 TEL:0279-30-6235(代表) FAX:0279-54-6115
 20,181m²(6,105坪)
 総 敷 地 面 積 第一倉庫(2,000坪) 第二倉庫(1,000坪) 第三倉庫(740坪)
 営 業 倉 庫 第四倉庫(865坪) 第五倉庫(1,000坪) 駐車場(3,000坪)

商 号 ハルナエコロジー株式会社
 法人登記 2004年1月9日
 代 表 者 代表取締役社長 青木 清志
 事 業 内 容 国内販売・海外輸出
 海外製品マーケティング輸入販売
 飲料製品の商品企画開発
 資 本 金 5,000万円
 売 上 高 2億5千万円
 本 社 東京都中央区日本橋3-5-13 三義ビル5F
 TEL:03-3517-5745(代表) FAX:03-3275-0192
 関 連 会 社 ハルナエコロジー西日本株式会社
 福岡県福岡市南区若松2-14-24-801
 TEL:092-565-2643(代表)
 フリーダイヤル:0120-867-249

ウエルネス
サイエンス
研究所
所長 医学博士 青木 陽生
主席研究員 農学博士 邑上 豊隆
特別顧問 工学博士 大野 寿彦
~アドバイザリー コミッティ~
·青木 陽生 医学博士 免疫学(慶應大学医学部出身)
·五島 知郎 医学博士 消化器(医療法人三愛会 院長)
·伊谷野 克佳 医学博士 循環器(伊谷野クリニック院長)

商 号 タニガワビパレッジ株式会社
 法人登記 2008年1月1日
 代 表 者 代表取締役会長 青木 清志
 代表取締役社長 中澤 幹彦
 資 本 金 2億円
 社 員 総 数 110名
 事 業 内 容 清涼飲料水の製造販売 豆乳受託事業
 本 社 群馬県利根郡みなかみ町政所1011番地
 製 本 部 TEL:0278-62-1111(代表) FAX:0278-62-1144
 営 業 本 部 東京都中央区日本橋3-5-13 三義ビル5階
 TEL:03-3275-0191 FAX:03-3275-0192
 経理財務部 群馬県北群馬郡棟東村広馬場3044-12
 TEL:0279-55-1241 FAX:0279-55-1344

商 号 Haruna Europe SA
 法人登記 2007年10月23日
 代 表 者 CO-Founder 青木清志
 CO-Founder Peter Larsson
 事 業 内 容 ·飲料、食品の開発販売
 ·輸出入販売
 資 本 金 15万ユーロ
 社 員 総 数 6名
 本 社 102 Avenue des Champs Elysées 75008
 Paris, France
 Orders and logistics Europe:
 TEL:+351 21 390 3559
 FAX:+351 21 397 6403

商 号 ハルナインテリジェンスネットワーク株式会社
 法人登記 2008年4月1日
 代 表 者 代表取締役社長 栗原 健一
 事 業 内 容 ·人事管理
 ·資金調達及び資金管理・運用
 ·会計業務
 ·情報ネットワークの構築・管理
 ·人材教育
 ·CSR
 ·株式上場
 資 本 金 1,000万円
 社 員 総 数 9名
 本 社 群馬県北群馬郡棟東村広馬場3044-12
 TEL:0279-55-1241(代表) FAX:0279-55-1344

沿革

1996年	2月 資本金30,000千円で法人設立 5月 第一回株式上場準備委員会開催 7月 取締役会で株式公開することを決議 11月 東京にマーケティング本部設置
1997年	3月 従業員持株会発足 5月 ハルナビパレッジ研究所設立 6月 第二工場稼働開始
1998年	10月 新日本監査法人による調査及び指導開始
2000年	2月 第三工場稼働開始 5月 HACCP取得に向け合同委員会発足
2001年	7月 第三工場JAS認定工場許認可取得
2002年	2月 リサイクルシステム協議会発足 8月 第八期第1四半期報告会開催スタート
2003年	4月 環境会計に着手 4月 企業競争力の強化を図るため市場開発部門を設置 4月 HACCP総合衛生管理委員会発足 10月 「デカテス」産学官共同開発プロジェクト開始 （高崎健康福祉大学） 12月 第四次中期経営に向け収益構造の実現を図るため投資を実施 [人材教育投資、生産合理化投資、総合衛生管理 HACCP対応投資] [第二工場において、品質及び生産性の向上を目的とした、 クリーンルームと充填設備を増設]
2004年	4月 物流関連企業ハルナロジстиクス株式会社設立 10月 成果主義の導入
2005年	4月 ビジネスクール開講 10月 敷地内に緑地公園を整備、地元に開放
2006年	1月 会社のIT化に着手 2月 創立十周年記念式典開催 4月 ハルナビパレッジ株式会社 代表取締役会長に青木清志就任 代表取締役社長に小出信介就任 5月 ハルナエコロジー株式会社 研究開発分野 海外事業部分野拡大 9月 全工場においてHACCPの承認
2007年	2月 本社工場「食品衛生優良施設」 群馬県知事賞受賞 3月 リサイクルシステム協議会発足 4月 ハルナエコロジー株式会社 ウェルネスサイエンス研究所発足 10月 タニガワビパレッジ株式会社創業 代表取締役社長に中澤幹彦が就任 10月 ハルナヨーロッパSAフランス/パリにて ハルナグループとPeter Larsson氏共同創業 12月 グループ会社 合同の全体会議開催
2008年	1月 タニガワビパレッジ(株)事業開始 3月 タニガワビパレッジ(株)設備完成竣工式 4月 ハルナインテリジェンスネットワーク株式会社創業 代表取締役社長に栗原健一が就任 4月 株式会社ハルナ品質環境研究所 代表取締役社長 古米地章 ハルナビパレッジ研究所を商号変更し事業開始



1996年2月起業

起業者である現代表取締役会長青木清志が、徹底したマーケティングを行いペットボトル飲料に可能性を見出し、関東1、水の良質さ、競合他社が多く、また物流拠点としての立地条件から群馬県高崎市足門町に「ハルナビバレッジ(株)」を創業しました。創業後3か月後、株式上場公開を発表、準備委員会を発足。営業拠点を東京に事務所を開設しました。

社員への福利厚生の充実 研究所設立における 品質管理向上安全性の重視

起業1年後1997年には、社員の経営参画意識を高めるため従業員持株会を発足、当時従業員49名、役員を除く41名全てが持株会へ入会しました。2ヶ月後に品質管理の徹底強化と品質向上を柱にしたハルナビバレッジ研究所が創立しました。



監査による経営管理の徹底

創立より2年目に、経理・財務面の透明性を図るために、新日本監査法人による調査指導を開始致しました。現在でも継続して、ご指導をいただいている。

衛生管理の徹底： HACCPへの挑戦

総合衛生管理製造過程(HACCP)の認証を目指し品質改善、品質方針・目標を掲げたHACCP合同委員会を発足しました。

四半期報告による経営の透明性

株主の皆様や金融機関の皆様をお招きした四半期報告会を開催。経営・生産・営業・品質の報告をスタートさせました。



使用済み茶葉のリサイクル活用

使用茶葉を地元の農家の方々へ提供し、肥料に使用して頂くりサイクル活用の実施をしています。

健康に着目した 地元県産品の飲料化

地元県産品「はたけしめじ」を産学官で研究開発し飲料の製品化をはじめました。

顧客満足に応える倉庫・ 物流会社の設立

お客様のご希望にお応えした、物流及び倉庫業務「ハルナロジスティクス(株)」を設立しました。

企業価値を創造する人材育成

人事基本理念制定プロセスイノベーション型成果主義を導入しています。企業価値を創造する人材集団、社員育成となる製造者養成ビジネススクールを開講しています。

地元地域の方々とのふれあい

群馬県高崎市足門町、敷地内に緑地公園を整備、地元に開放しています。四季折々の草花が咲き、地元住民の方々や社員の憩いの場として活用しています。

健康をテーマとした商品の開発

ハルナエコロジー株式会社は「健康」をテーマにした研究開発分野と海外商品分野を拡大、その1年後には医師のアドバイスのもとウェルネスサイエンス研究所で本格稼動しました。

全工場においてHACCPの認証

ハルナビバレッジ(株)全工場においてHACCPの承認。本社工場「食品衛生優良施設」群馬県知事賞受賞。

健康飲料を世界へ

世界で認知されるべく日本のお茶を海外へ向け販売、スエーデン出身のPeter Larsson氏と世界へ広めたいとハルナグループは「ハルナヨーロッパSA」共同創業しました。



環境会計の報告

2003年4月環境会計に着手、四半期報告会で公表してきました。省エネルギー対策、廃棄物の再資源化、減量化対策に取組んでいます。

社員同士の交流会議

グループ会社社員一同が集合し、自身の仕事への心情や会社の将来を会話出来る場となる合同全体会議を開催しています。



ものづくりへの取り組み

Haruna bev factory

湯水にお茶の葉を入れて攪拌を行います。



お茶の成分を抽出します。



固体物を分離させます。
お茶をより澄んだ液にします。



液を通過・透き通るお茶を作ることが出来ます。



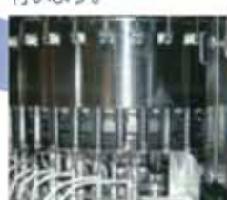
大きなタンクに仕込みます。



プレートにより内容液を加熱し高温で殺菌を行います。



空PETボトルに内容液を充填。ホットパック充填を行います。



ボトルを倒してキャップ内側を内容液の温度で殺菌します。



徹底した殺菌

ボトルを冷却。热水シャワー水でもシャワー殺菌です。



ボトル1本1本にデザインラベルを被せます。



高温の蒸気を吹き付けてラベルを収縮させます。



カートン単位で詰めています。
ラップアラウンド式を採用しています。



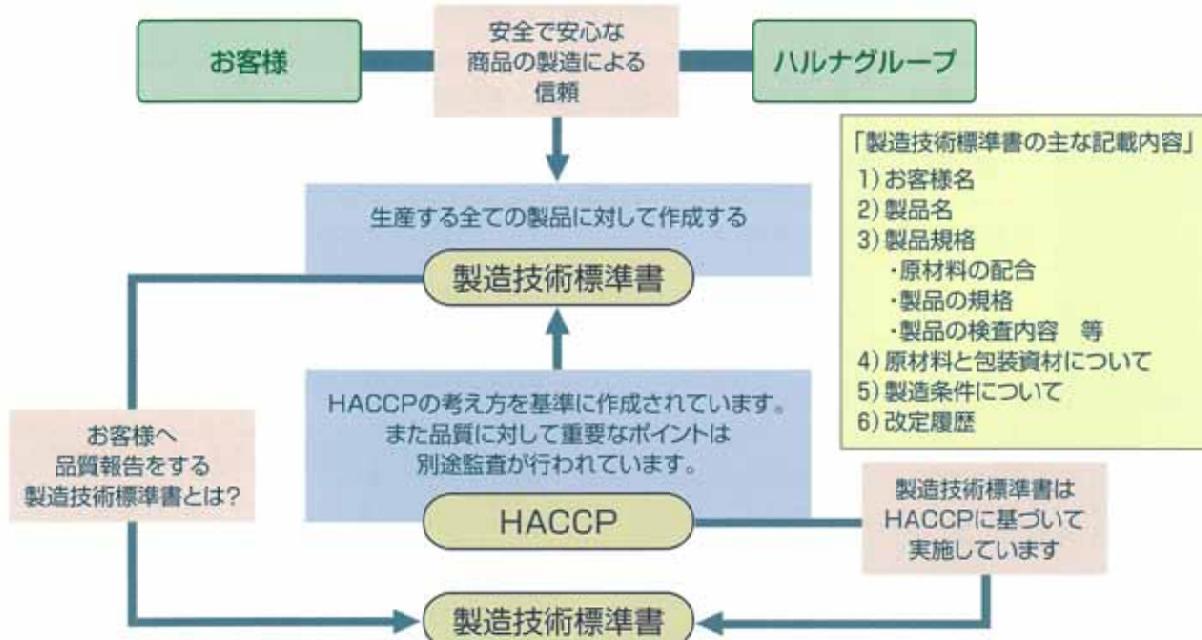
1ケースごとに本数抜けが無いか重量を量り検査します。



出来上がった製品を物流用のパレットに積み付けます。

安心した商品をお届けします。

■ハルナグループでは、経営理念の基本ともいえる
お客様との関わりを大切にしています。



～ 現場管理の徹底 ～

1
HACCP
内部監査

HACCPプランの有効性を評価し、システムが適性に機能していることを確認するため、また、定期的な検証の結果から、当社のHACCPシステムの弱点を認識することにより、HACCPプランを修正し、より優れたものにするための一環としてHACCP内部監査を実施しています。監査員が工場内で、5Sの状況はどうか、工場担当者の作業状況に問題がないか、外部監査を想定したOJT、以前指摘した改善箇所がきちんと改善されているか等のチェックを実施しています。監査はその都度監査員を選任し年2回の頻度で各工場実施しています。

2
工場環境
調査

工場内の環境衛生維持及び向上を目的として、品質保証本部担当者による工場環境調査を年4回の頻度で各工場実施しています。問題箇所の指摘及び改善状況の確認を行なうことで環境衛生の向上を図っています。

3
安全衛生
パトロール

従事者の労働災害防止及び作業環境の改善を目指し、安全衛生委員による安全衛生パトロールを毎月実施しています。問題箇所の指摘及び改善状況の確認を行なうことで労働災害防止及び作業環境の改善を図っています。

各部署の役割

ハルナビバレッジ本社工場(第1~第3工場) 各工程グループ

調合	抽出	茶葉を温水に投入、攪拌する事で茶葉に含まれる旨み、渋味、香味などの味に寄与する成分を抽出します。
	抽出液濾過	遠心分離機や珪藻土濾過、フィルター濾過等を行う事で濁り成分を除去しクリヤーな液に仕上ます。
	調合	製品液として仕上げて行く工程です。色、味、pH等規格通りの内溶液を製造します。
	殺菌温度管理	弊社の実践しているHACCPにおける重要管理点である殺菌温度の管理を担当しています。
充填	ボトル洗浄	液が充填される前の空のPETボトルを洗浄します。異物混入や微生物汚染などの対策の為、高い頻度での管理が行なわれます。
	充填	殺菌後の実液をボトルに充填します。容器サイズごとに過不足無い安定した内容量(充填量)を管理しています。また、85度前後の液温を殺菌に利用する為、液の温度管理についても厳格な管理が行なわれています。
	キャッピング	充填されたボトルに対し速やかにキャップを装着(巻き締める)します。ボトルとの密閉性は高い品質が必要とされる為、2重3重の管理を行なっています。 (全工場でサーボ制御式キャッパーを使用)
包装	包装、箱詰め、ケース積み付け	外観包装を担当する工程です。ラベル装着→個装印字(賞味期限等)→箱詰め→パレット積を主な作業とし消費者の方が手に取った時の外観品質に大きく係わる部署です。
	外観検査	検査機を使用しキャップ、ラベル、入り味量、印字(賞味期限等)の検査を行い万一の際も不良製品を流出させない。管理を実施しています。

生産管理部

購買チーム	購買業務管理	生産計画に合わせた柔軟かつ迅速な対応と精度の高い実務を心がけお客様の要望と生産現場の橋渡しを担います。
	原料、資材在庫管理	受発注時における正確な在庫管理を行いお客様との信頼関係を築いています。
	資材価格交渉	原材料、資材等のコストダウンに取組み製造経費の削減を継続します。
調達チーム	入荷資材確認	原材料、資材の受入を担当し、入荷ミス、不良資材の納品をチェックしています。
	資材保管状態確認	原材料、資材の倉庫における保管状態(温度・湿度)の定時チェックや誤使用防止の為の整理整頓を担当しています。
技術チーム	生産立会い	テスト生産や初回生産時に製品の仕様、工程等の管理監督を担当し初期トラブルやミスの発生を未然に防ぎ速やかな実生産を実現します。
	原料・資材テスト	原材料および包装資材の新規使用に対しお客様の窓口として事前確認～テスト計画、検証します。
	情報管理	原料、資材の使用履歴である「LOT管理システム」各設備費用管理の為の「支出・稟議管理」等、生産関連データのデータベース管理を行い製造現場を支援しています。

環境・工務部

環境チーム	使用水管理	生産に欠かせない使用水(井戸水、純水)関連設備の管理、保全及び水質管理を担当しています。
	廃棄物管理	生産工程から排出される様々な廃棄物の排出業務を担当し廃棄物排出量の削減、3R推進活動を担当しています。
	排水処理管理	排水処理場(2箇所)工場から排出される排水の水質を監視し常に法令基準を満たした排水処理の維持を担当しています。
工務チーム	ユーティリティ管理	生産に欠かせない設備(ボイラー、コンプレッサー、発電機)、付帯設備の管理、保全を担当しています。
	エンジニアリング	不意な機器の破損、故障が発生した場合の修理や設備の改善、改造を行ない現場の速やかな復旧を支援しています。

お客様とのお約束を厳守しご希望に対応できるよう情報管理いたします。

情報管理チーム	製造技術標準書の作成・管理	製造技術標準書とは製品毎の製造条件や、配合、製品規格等を定めた標準書でこの標準書を基本として製品の製造を行っています。この標準書の作成と管理を行っています。
	ご指摘対応	お客様からの製品に関するご指摘等にお答えしています。
	検査報告対応	製品を委託されているお客様へご依頼のあった検査報告を実施しています。

お客様ニーズにお応えし安心した商品を作るため生産工程への指示や管理を行います。

工程管理チーム	指示書の作成	製品毎に定められた賞味期限等の表示が適切であるように指示書を作成しています。
	製造スタート前検査	安全な製品を製造するための製造スタート前検査を行っています。
	製造工程管理	製品を製造している条件が製品毎に決められた条件通りであるか定期的に工場を巡回しチェックしています。
	製品検査	製造された製品が製品毎に決められた製品規格に適合しているかサンプリングした製品の理化学検査等を行い確認しています。

水・資材・現場・製品への徹底した検査を行います。

微生物チーム	使用水の検査	製品に使用する水や工場内で使用する水を定期的にサンプリングし検査しています。
	資材の検査	製品に使用するボトルやキャップを定期的にサンプリングし微生物検査しています。
	工場環境調査	工場の衛生環境を維持・向上するため工場内の微生物検査や目視チェック等を定期的に行っています。
	製品検査	製造された製品が製品毎に決められた製品規格に適合しているかサンプリングした製品の微生物検査を行い確認しています。

HACCPの維持管理を行います。

HACCP事務局	総合衛生管理製造過程(HACCPシステム)の維持管理	厚生労働省から認証された食品をより安全に製造するための「総合衛生管理製造過程(HACCPシステム)」の維持管理を行っています。
	社員衛生教育	社員の衛生意識の向上を目的として衛生教育を毎月1テーマ毎実施しています。

外部へも品質管理を行います

外部委託工場の管理	外部品質管理	製品製造を委託している協力工場の工場監査や製造立会い等を行い品質管理を行なっています。
-----------	--------	---

HACCP総合衛生管理製造過程の認証取得

■より安全で安心できる製品づくりを目指して



2005年5月 社長を委員長とする
総合衛生管理委員会による全社的な取り組み

食品製造会社の責務としての
「安全で安心できる製品づくり」



具体的な取り組み

施設・設備の
衛生管理と
保守点検

従業者の
衛生教育
5s活動の推進

原材料、資材の
点検・検査

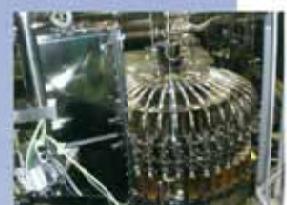
製造の理化学検査
及び
微生物検査等



製造工程の製造担当
及び品質担当による
ダブルチェック

原材料・製品に対する
LOT管理による
トレーサビリティ
システムの構築

従事者の
衛生管理



社員教育 延研修回数51回(述べ研修時間34時間) 延参加人員455名

第13期 実績

- | | |
|--------------|---------------------|
| 1:廃棄物の処理について | 7:食品添加物について |
| 2:そ族・昆虫について | 8:5Sについて |
| 3:食中毒について | 9:薬剤について |
| 4:微生物について | 10:総合衛生管理製造過程について |
| 5:従業員の衛生について | 11:記録の目的、取り方、保存について |
| 6:食品衛生法について | 12:トラブル再防止について |



2006年9月 ハルナビパレッジ全工場にて「HACCP」認証取得



2007年2月 ハルナビパレッジ本社工場にて
「食品衛生優良施設」として
群馬県知事賞受賞



HACCPシステムの維持管理、
設備改善のため
定期的な監査を実施しています。

Haruna 物づくりの現場～生産現場～

■「ハルナビグループにおける「ものづくり」キーワードは「考える集団」

取り組みについて

製造担当者全員参加型の会議「製造会議」

会議内容

* 毎月1回開催

- ・生産効率 ④ 資材ロス率
- ・工程起因クレーム
- ・労働災害
- ・生産時工程トラブル
- ・コスト削減

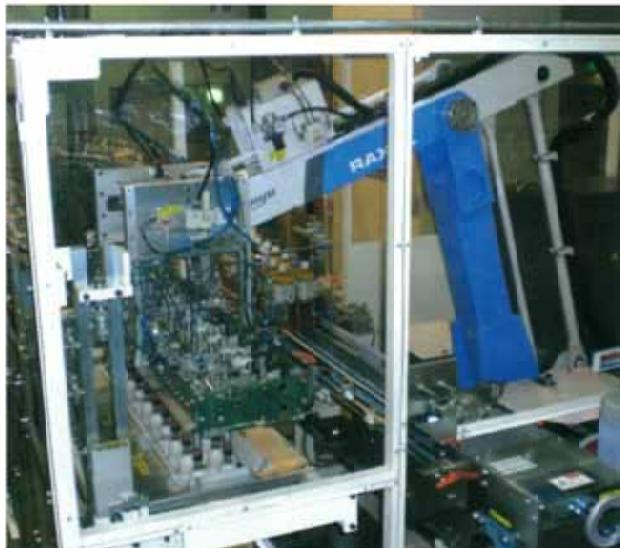
■ 生産現場の問題点を全員で「考えます」

「緊急改善: 対策委員会」

エキスパート結集の緊急プロジェクト

重大なトラブルの発生時に組織の枠を超えてシームレスにメンバーが集結し問題点の抽出、分析～対策案創出対策実施～効果確認までが最短時間で行う委員会です。
・第二工場対象に実施中

■ プロblemを最短時間で解決する為、 製造本部、品質本部一丸となって 品質最優先に「考えます」



「現場改善」

- 小ロット対応切替時間短縮(第一・第二工場)
- 熱効率改善・省エネルギー対策(第三工場)
- リードタイムの短縮(生産管理部)
- 排水処理能力増強、排出汚泥減容化(工務部)
- 廃棄物処理コスト削減(環境部)
- ステップアップ、レベルアップを目標に
社員自ら進んで「考えます」

「製造技術者としての必須科目」

「現場改善」

- ・新生工場プロジェクト(第一工場)
- ・アキュームコンベア新設(第二工場)
- ・緑茶対応化設備(第三工場)
- ・有機汚泥減容化装置導入(環境工務)
- ・廃棄物処理コスト削減(環境部)

社員の声 社会的責任に対する取組み



ハルナビバレッジ株式会社
執行役員 兼 製造本部長 三原 修一

製造本部では食品を製造しているという責任感、人の口に入る物=健康に深く係わる業種であり「飲料」という命の源泉に近い食品の生産を行なっている事の名誉を常に感じながら消費者の方に安全安心な製品をご賞味いただく使命感を持ち続けて行きたいと思います。製造技術者として正しいモラルと遵法の精神が必要となります。弊社は日々のミーティングや各種ビジネススクールにおいて製造担当者が同じレベルのコンプライアンスやモラルを共有できるよう取り組んでおります。

品質保証の役割からCSRを考えると当たり前のことになりますが、お客様が求める製品の安全と品質を確保し維持・向上していくことを1番に考えています。当社(ハルナビバレッジ:本社工場)は総合衛生管理製造過程の承認工場がありますが、その考え方とシステムを基本として製品の安全と品質確保に取り組みお客様に安心していただける製品を提供することが最大の役割だと感じています当社の経営理念である「顧客志向」を念頭に具体的な対策を実施し引き続き取組んでいきたいと思っています。



株式会社ハルナ品質環境研究所
執行役員 兼 品質環境本部長 古市 直也



ハルナビバレッジ株式会社
商品開発部 部長
ウェルネスサイエンス研究所 主席研究員 農学博士 邑上 豊隆

開発部では「より良い商品をお客様へ」をモットーとした商品開発を展開しております。お客様のご要望にお答えするために、原料選定から商品化まで、安全安心はもちろん、こだわりをもった商品開発に全力を尽くしております。さらに我々は清涼飲料水として、体を潤すだけの商品から、体を健康にする機能性飲料商品開発にも取組んでおります。心身ともにお客様が幸せになれる清涼飲料水の商品開発から、社会へ還元できる企業を目指しております。



株式会社ハルナ品質環境研究所
品質環境部 部長 中久保 寛

商品の「安全・安心」については当然の前提として捉えられていますが、品質保証の立場からすれば、当然のことを当然のように行うための知識・行動の重要性、それを継続するための日々進歩していく会社にしたいという思いがあります。今まで出来ていなかったEOSH(Environment & Occupational Safety and Health)活動を実践することによりCSR活動を展開したい。同時に、「EOSH活動は企業収益に直結」することを浸透させ、「安全・安心・環境」でお客様、地域に貢献すると共に、社員、家族全ての生活も保障できる会社にしていきたいと考えます。



ハルナビバレッジ株式会社
執行役員 兼 営業本部副本部長 山崎 敦也

営業本部では、お客様はもちろんステークホルダーの方々と直に接するため、当社の理念である「顧客志向」を主にしたコンプライアンス遵守を基本姿勢に営業活動を実践しています。具体的には生産商品の品質は基より、大切な皆さまの情報管理の徹底は重要であると考えています。今後は、実践的で幅広い範囲の「経営貢献」「社会貢献」を意識したマネジメントサイクルを果たしていきたいと考えています。

Haruna Group 設備改善計画

当社ではより安全で美味しい良質な飲料をつくるため、最新の生産設備の増設や改修工事を積極的に進めて、より新しく安心な設備で商品を生産しています。最近の設備工事の内容をご紹介いたします。

■新生工場プロジェクト第1工場(新生工場プロジェクト(2006年10月～2007年9月))

第1工場の心臓部であるフィラー、キャッパーは工場設立当事に設置したものであり、稼動から10年以上が経過していました。HACCPの認証を期に改めて製品品質の向上を課題とし、ラインの機械停止トラブル低減と合わせて各設備の大規模な更新を実施いたしました。今回の工事では新規のフィラー、キャッパーを導入するのみでなく巻き締め状態を管理可能となるサーボコントロール式キャッパーを採用する等、より安全、安心を実感できる生産工場として弊社第1工場は「新しく」「生まれ変わった」新生工場として稼動しております。また、生産能力も改善され、従来比で約10%向上させる設備対応といたしました。これにより従来第1工場では年間450万ケースが最高生産でしたが第14期では470万ケースの生産計画となっており、将来的には500万ケースの生産を目標とする計画です。



■第三工場(緑茶対応化工事 (2007年12月～2008年1月実施))

第二工場では、従来から小型の茶系飲料を生産していましたが、お客様のニーズが大変強く、また生産する品種が毎年増加する傾向にありました。そのため、お客様のニーズに充分お応えすることができない状況が、ここ数年常態化しておりました。そこで、弊社ではお客様のニーズに対応し、かつ生産効率の向上も同時に図るため、小型茶系飲料で生産ロットが大きい製品について、能力が高い第三工場で茶系飲料を生産することとしました。従来、第三工場では、果汁飲料を生産していましたが、今回タニガワビバレッジがグループになったことにより、高濃度の果汁については、タニガワビバレッジへの生産を移管し、第三工場に緑茶製造設備を導入して、第三工場では、茶系飲料と低果汁飲料を製造するように、生産体制を効率的に再配分することとしました。今後は、能力が高い第三工場で緑茶を生産していくため、お客様のニーズに充分応えられる生産体制となります。



資材運送・保管設備



珪藻土濾過設備



抽出機

新設タンク類



茶粕水搬送設備



■第二工場(アキュームコンペア導入工事 (2007年12月～2008年1月))

第三工場で茶系飲料を生産することとなったため、
生産ロットの大きい製品については、原則的には、能力が高い第三工場での生産となります。
そのため、第二工場では、多品種少量生産に適応した茶系飲料の生産体制が求められることとなりました。
従来、第二工場の課題としては工場内部に余裕を持ったスペースが少ない為、
品種切替の増加と共にライン効率や歩留率が低下する問題が有りました。
そこで、弊社では、第二工場には旧フィラー・キャッパーを撤去したスペース
(3年前に撤去・新設しました)があることに着目し、そこに機械トラブルが発生した場合には、
一時的に製品を滞留させることにより生産を続行し、
かつ調合液を廃棄するケースも少なくなると見込んでおります。

第二工事旧フィラー撤去・バストクーラー、アキューム増設



旧充填室跡のエリアを利用し
下流トラブル発生時間を吸収、充填機稼働率を向上させる
(目標値+3%)

■タニガワビバレッジ株式会社 設備工事

タニガワビバレッジは、同業他社より営業を全て譲り受ける形で発足した会社となります。全ての建物・設備も譲り受けをしましたが、充分なメンテナンスができない状態が長年にわたって続いておりました。そこで、弊社として、ハルナグループの品質基準を満たすものとするため、全ての建物・製造設備を見直し、弊社基準として適合できる工場とするための工事を実施いたしました。

また、ハリナビバレッジ第三工場で茶系飲料を生産するため、高濃度の果汁飲料については、ハルナビバレッジからタニガワビバレッジへ生産を移管することとなったため、その高濃度果汁飲料への生産対応工事も併せて実施いたしました。

タニガワビバレッジは本改修工事で品質を充分担保するとともに、将来的には、ハルナビバレッジと同様に品質基準としてHACCP取得を計画していきます。



シェル&チューブ殺菌機
(新規導入機器)

ホモゲナイザー
(更新設備)



ウェイト
フライー
(新規導入)



ロータリーリンサー
(新規導入)

サーボキャッバ
(新規導入)



開発事業

開発部ではお客様へ提案する飲料製品の研究開発業務を行っております。
マーケティング部との連動により商品コンセプトから商品を具現化させ、試作品の製作、
それら試作品の品質検査及び賞味期限の設定までを行っております。

試作可能 液種	・茶系飲料(緑茶、烏龍茶、紅茶(果汁入りも可)、混合茶) ・果汁飲料(混濁透明0~100%果汁飲料、ネクター系飲料) ・野菜飲料(野菜飲料、トマトジュース、果実野菜ミックスジュース等) ・乳性飲料(脱脂粉乳、練乳、増粘多糖類等を用いた酸性乳性飲料) ・ニアウォーター(天然水商品も可能) ・スポーツドリンク(各種ミネラル、各種ミネラル等付加飲料、塩化物イオン濃度300PPM以下必須) ・ミネラルウォーター(谷川天然水)
容器	ペットボトル280ml、350ml、500ml、1.5L、2L(多面、角、スリムボトルペットボトル)
殺菌温度	95~138℃(液種により異なる)

研究開発プロセス

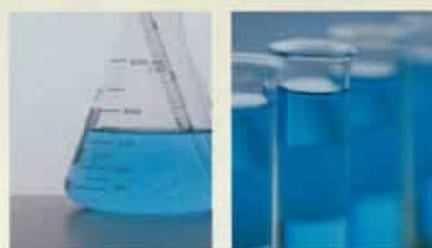
1 商品イメージの 設計

営業部及びマーケティング部との連動により、お客様がどのような商品を求められているか、製品イメージを作り上げる段階となります。



2 レシピ案設計 及び 原料調整

製品イメージから、レシピ案を設計し、その設計案から、実際に原料サンプルを取り寄せ、イメージ通りのものであるのか、品質的に安全であるのか、製造レベルにおいて問題はないか等を検討し、原料選択を行います。



3 試作品製作

レシピ案に従い原料サンプルを用いて試作品を製作いたします。実際の製造ラインでの調合フローとして問題が無いか検討する場でもあります。飲料は食品であることから特に微生物管理が重要となります。そこで、製品化するために工場で用いているのと同等レベルの殺菌機を用いて、製品内容を殺菌し試作品を完成させております。



4 試作品の品質評価 及び賞味期限 設定

試作品を用いて実際に試作したものが商品として品質的に問題が無いか評価を行います。同時に商品には必ず賞味期限が必要ですから、その期限設定のための試験を行います。

ウェルネスサイエンス研究所

2007年R & D開発部門がメディカルドクターを終結し、
「健康」に着目した飲料の開発を行う本格的な研究機関が設置されました

2003年10月より地元群馬の県産品きのこを飲料化するプロジェクトを地元大学との産学合同研究プロジェクトを開始しました。一般には「ハタケシメジ」と呼ばれているきのこです。学名の「デカステス」という名前を付けました。見かけは一般的の「ブナシメジ」に似ていますが、ハタケシメジは「香り松茸、味シメジ」と言われるシメジ属に分類され、その通り大変香りが良い美味なきのこです。

ハタケシメジは、健康維持および疾病の改善などの機能性食品としても注目されており、現在は医療法人三愛会クリニックの協力のもと、臨床試験、研究を重ね、機能性素材のひとつとして取組んでいます。

・新規機能性原料開拓業務	「健康」をキーワードとした新規機能性原料探索及び選抜
・原料機能性分析業務	選抜された原料から機能性の証明実験及び機能性物質の同定
・機能性原料の製品化設計業務	機能性製品として使用できるように原料製品設計
・機能性原料製品の臨床試験業務	内部及び外部機関による機能性原料製品の臨床試験



医療アドバイザリー

青木 陽生 医学博士	専門:免疫 慶應義塾大学医学部 出身
五島 知郎 医学博士	専門:消化器 医療法人三愛会クリニック 院長
伊谷野 克佳 医学博士	専門:循環器 医療法人ファミリークリニック蒲田 院長



Haruna Ecology Co.,Ltd.

ハルナエコロジーでは、美味しい体にやさしい商品をコンセプトにした、
ナチュラル商品を世界各国より選び輸入し販売しています。
また、世界より注目をあびている日本製お茶を
独自開発にてブレンドして、ヨーロッパへ販売しています。



Everyone knows it's good to eat healthily,
but in a busy life it can sometimes be hard to
consume the recommended 5 daily servings of fruit and veggies.
Make it a little easier for yourself, stock up on mySmoothies,
giving you a daily serving straight out of the pack.

ハルナエコロジー株式会社では、健康志向に着目し、
体に優しい、美味しい飲料をお客様へご提供をしたいという一途な思いで、
世界各国より安全で体に優しい美味しい飲料を輸入し日本国内で販売しています。
まずは、2007年4月「スウェーデン産のマイスマージー」の販売から始まりました。
マイスマージーは、100%フルーツ飲料、保存料、砂糖、
添加物、グルテン、乳成分、遺伝子改良素材等を一切含まない飲料です。
国内の大手百貨店やナチュラル志向のコンビニエンスストアから販売を開始致しました。
大きな宣伝活動はしておりませんでしたが、
パッケージの可愛らしさや、100%のフルーツジュースの美味しさ、
一日に必要な果汁摂取量が1本からとれるという手軽さから、
OLを始め女性のお客様からの口コミで広がっていきました。
2008年4月、女性雑誌に取り上げられるほどの人気商品となりました。
現在はブルーベリー、マンゴー、ピーチ、ストロベリー、ラズベリー、パッションフルーツの
6種類を取り扱いしていますが、今後はブルーベリー、ザクロ、アサイーを加えた
「スーパーフルーツ」という商品ラインナップをひろげていきます。

Haruna Europe SA

■COMPANY 日本発ナチュラル緑茶の販売、ハルナヨーロッパ第1弾オリジナル商品です



CO,Peter Larsson と Director,Hideo Aoki



HarunaEuropeSA現地スタッフ



Sarah SheppardさんとJonas Lundinさん

2007年10月ハルナグループとスウェーデン出身のPeter Lars Vilhelm Larsson 氏と共に創業したハルナヨーロッパSAでは、世界より認知するべく日本のお茶を、世界中で販売したいという意向をもとに、3種類を開発販売することとしました。

開発に先がけて、ヨーロッパにて徹底した市場調査を行った結果、

- ・オリジナルはグリーンティーにライムのフレーバーを加えたさっぱりテイストの飲料。
- ・デトックスはグリーンティーにブルーベリー、ザクロ、ハチミツをブレンドした飲料
- ・ブースターはグリーンティーにジンジャー、高麗人参、ハチミツをブレンドした飲料の3種です。もちろん保存料、砂糖、添加物、グルテン、乳成分、遺伝子改良素材等を一切含まない飲料です。

デザインは「クールジャパン」のイメージを元に、スエーデン在住のデザイナーSarah Sheppardさん、Jonas Lundinさんが作成し、好評を頂いています。

まずは2008年4月、フランス世界一老舗デパートのオーパンマルシェにて販売開始、日本国内でも大手百貨店、ナチュラル志向のスーパー、カフェにて販売中です。

今後も世界各国へ、日本のより良い飲料をお届けしたいと考えています。

We are a well trimmed team of working professionals with one mission in mind:

To bring a unique Healthy Life-Style to the West

Haruna Europe are committed to bringing healthy Japanese beverages to the European market place, with offices in Tokyo, Paris, Stockholm and Lisbon.

For further inquiries please contact us at: info@yoshi-go.com

Haruna Europe SA

102 Avenue des Champs Elysées
75008 Paris, France

Orders and logistics Europe:

tel: +351 21 390 3559

fax: +351 21 397 6403

[Y_sh]- Japanese for "Let's Go!", "Let's do it!"



環境への取り組み

Haruna Group 社会貢献

■ 基本理念

当社では「人と生態系との共存」を基本理念として、
安全で美味しく、地球環境にやさしい製品づくりを目指します。

当社では、企業の成長発展と環境の保全育成が、持続可能な形で調和させていくことを
重要な企業テーマとして認識し、環境保全育成に積極的に取り組んでまいります。

具体的には、当社が排出する汚泥や排水によって、地域環境へ大きな負荷をかけないように配慮するとともに
環境への貢献を積極的に捉えて、河川の清掃活動や公園の造成開放を手がけてまいりました。

当社は、地域環境より大きな恩恵を受け今日に至りましたが、企業は社会の公器であり
地域環境に大きな影響を与える存在であると認識しております。

地域環境への配慮なくして、企業の持続的成長発展は非常に困難であるとの認識のもと
環境保全育成活動は、地域環境へ悪影響を与えないような配慮のみならず
積極的に環境に貢献していくとの視点のもと、今後も環境への取り組みを考えてまいります。



■～地域社会貢献～ 1

唐沢川清掃活動

2000年より地域環境への貢献活動として群馬県北群馬郡から利根川へ続く唐沢川の清掃を唐沢川水利組合と協力し年1回の清掃活動を行っています。
「唐沢川」は群馬町を流れる小さな川ですが、「利根川」へ合流する水が流れています。
現在でもヤマメが住める環境の川です。私達はこの地元自然環境を都心の方々へ、また後世へ継続させるため、地域の皆様との協力で活動をおこなっております。



工場周辺を流れる唐沢川の清掃は今年で8年目を数え、継続した代表的な活動の一つです。皆様にお届けする、清涼飲料水を製造している生産工場である高崎市足門町では、日頃お世話になっている地元へ地域環境の向上を目指して、積極的に清掃活動を行っております。
小さな努力から地球環境、地域貢献を考えています。



■～地域社会貢献～2

地域へ公園提供

2005年10月にハルナビバレッジの工場がある高崎市足門町に四季折々の草木を楽しめる緑地公園「ハルナコミュニティガーデン」を整備し、地元の住民の方々へ開放しております。



*緑の地面にシートをひろげて、手作りのお弁当を食べましたが、ほんとうにごうかなごちそうになりました。青い空に桜の花びらがひらひら舞ってシートに座りながら上を見ると桜の花がいつも見ている桜とはまた違ってみえるのです。なんだかちょっと不思議な気持ちになりました。お腹も満たされ、心も満たされ、花見は良いです。こんなにも近くに桜を感じる場所があるとは、ハルナ公園は穴場です。

*会社の帰りにふと立ち寄れる公園です。桜を眺めながらの宴もなかなか良いものです。快晴に恵まれて、満開の桜にとても目の保養をさせてもらいました。

地元の方からの
ご意見



■～地域社会貢献～3

地元学校や団体への工場見学

当社では、地元小学校を始め群馬県議会・大学・商工会の方々へ工場見学を実施しています。

地域の方々へ当社工場を見ていただく事により、交流を深め

当社製品の製造工程をご覧頂き、製品の品質管理の徹底をご確認頂いております。

たくさんのお子様達から楽しかったと、お手紙を頂いています。

また大学生や大学院生の方々へ実際の物づくり現場をご覧頂き、

アントレプレナーシップに貢献をしていきたいと思っています。



工場見学後の ご意見



○工場見学の前にわかりやすく説明していました
だき、ただ見るだけでなく、理解の伴う見学が
出来ました。

○メーカーは、使用する側の要望や使い勝手
に配慮して、様々な工夫や企業努力をしてい
ることを知りました。

○原材料から製造の過程に至るまでの安全・
安心の確保に関しては特に関心を持ってい
たところですが、工場内は全自動化されてお
り、衛生管理は大変行き届いていました。最
後に完成された製品を人がチェックしている
ところを見て、安全・安心な製品をつくること
を何より大切にしていることを感じました。

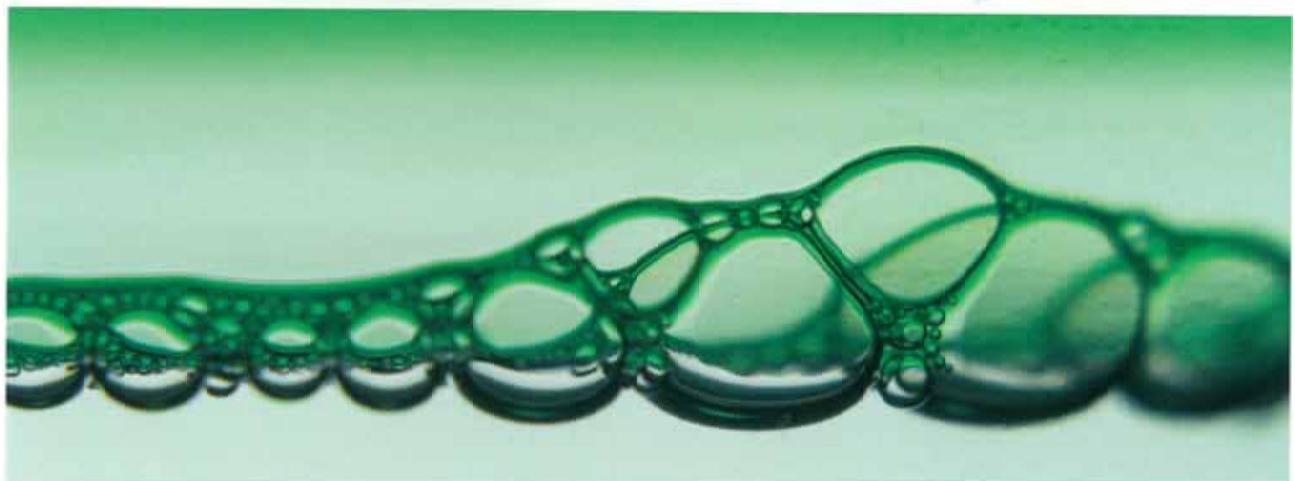
○海外から調達される原料等についての安
全確保についても、残留農薬のチェックや現
地視察を行っていることを伺いました。全工
程において行き届いた厳しい管理を貫いて
いることに、身近な製品のうらにある、会社側
のたゆまぬ努力とよい商品を届けたいという
情熱を深く感じました。



■～地域社会貢献～4

排水処理改善システム

当社では美しい地球環境を守るために、少しでも力になりたいと考えております。大切な水資源を利用していただいている当社は、特にその最終段階の排水処理水に関しては、法令の遵守、誠実・正直をモットーにこれからも真剣な取り組みで進めていきたいと考えております。当社では、特に排水が河川の環境に負荷軽減のために処理施設の浄化処理能力の向上に努めてまいりました。その結果、二つの排水処理施設は、いずれも活性汚泥処理を取り入れておりますが、一つは接触膜（バイオモジュール）を利用して多種多様な生物種を生成付着させ、汚れの原因である有機物を食物連鎖により分解処理する方法であります。もう一方は充填材の目詰まりを無くする為、連続洗浄方式という、ばつ氣槽の下部に設置した散気装置を回転させ充填材に付着した生物層による排水浄化を行ないながら、充填材洗浄を連続的行なう構造となっております。



■～地域社会貢献～ 5

汚泥処理改善システム

一般的に採用されている活性汚泥式の排水処理施設は、

工場排水を「ばっ氣槽」といわれるプールやタンクに入れて空気を送り込み

「活性汚泥(好気性菌の固まり)」を活発化させて有機物を処理し、浄化しています。

この方法では好気性菌により処理しきれない(食べきれない)「余剰汚泥」が最終的に残ってしまうことがあります。

汚泥は硬い細胞膜に覆われていて、そのままの状態では活性汚泥が

消化しきれないからであり、この余剰汚泥の最終処理方法が社会問題でした。

当社はこの汚泥を、アルカリ性にし、高温と圧力で処理をナノサイズの液化汚泥まで溶融して

再びばっ氣槽で処理する方法を採用しており、汚泥の減量化に大きく貢献しております。



Haruna Group 環境会計

■環境会計の意義

当社では、環境への貢献を全社的に推進し、またその結果をステークホルダーの皆様にご理解いただくために、2003年より環境会計を導入し、以降四半期報告会で報告させていただく内容としてまいりました。環境会計は、グループ内部ではハルナ品質環境研究所が作成いたしますが、その基礎データは現場の各担当部署が集計し、環境への貢献度が高まるよう日々改善を行っています。月に1回、環境委員会が開催され、その会議で毎月のデータの報告、改善項目の発見と改善の進捗状況、今後の取組方針などが協議されます。当社は、今後も環境への貢献を推進していくための重要な分析および報告方法として、環境会計を充実させ改善を重ねていきます。



■啓発活動

総合衛生管理委員会

HACCPシステムの維持管理及び更なる改善を目的として毎月1回委員会を開催しています。

環境委員会

環境会計を推進させるとともに、社内のコストを分析し、提案改善を行う会議の実施。

安全衛生委員会

職場における安全と健康を確保し快適な職場環境を形成し、労働災害の提案・徹底をさせる委員会。

改善提案

災害の未然防止、環境保全、業務効率の改善等を全社員より提案要望しております。



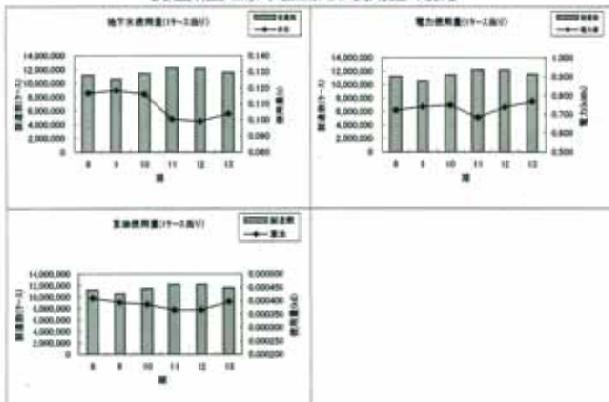
■環境保全コスト

環境活動のための設備投資額と経費

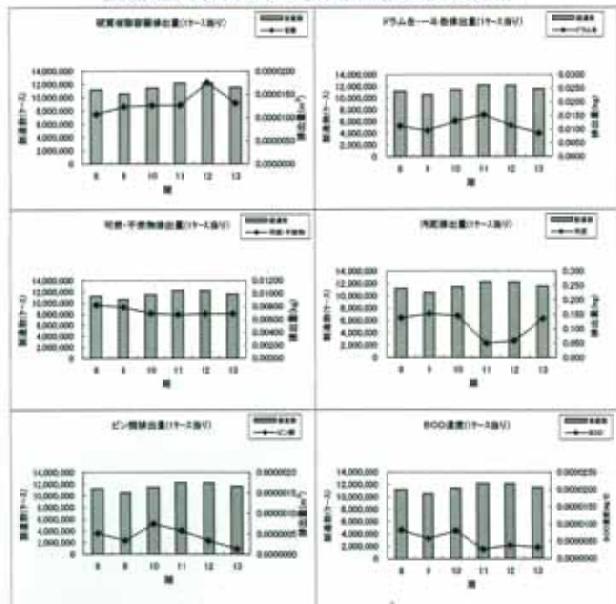
(単位:千円)

環境保全コスト				
分類		主な取組の内容及びその効果(ガイドラインより)	投資額	費用額
1. 事業エリア内コスト		生産・サービス活動により直接発生する環境負荷を抑制する取組みのためのコスト	128,992	52,080
内訳	① 公害防止コスト	公害防止(大気、水質、土壤、騒音、振動、悪臭、地盤沈下など)のためのコスト	120,530	13,652
	② 地球環境保全コスト	地球温暖化防止および省エネルギー、オゾン層保護などを行うためのコスト	3,000	11,735
	③ 資源循環コスト	廃棄物の削減・リサイクル・適正処理・水使用量の削減などを行うためのコスト	5,462	26,693
2. 上・下流コスト		生産・販売した製品、包装容器等の使用消費・破棄等の環境負荷を抑制するためのコスト	0	8,248
3. 管理活動コスト		環境システムの整備・運用、情報開示、広告、従業員広告などのコスト	0	10,595
4. 研究開発コスト		研究開発コストとして把握している研究開発活動のための人件費を含むコストのうち、環境保全に関わるコスト	0	6,312
5. 社会活動コスト		自らの事業活動に直接的には関係ないものの企業等の社会活動における環境保全に関する取組、又は情報公開など企業等が社会のコミュニケーションを図る取組のためのコスト	0	481
6. 環境損傷対応コスト		過去の汚染(地下水、土壤など)に関する調査および対策など、事業活動が環境に与えた損傷に関して生じたコスト	0	0
小計			128,992	77,716
合計				206,708

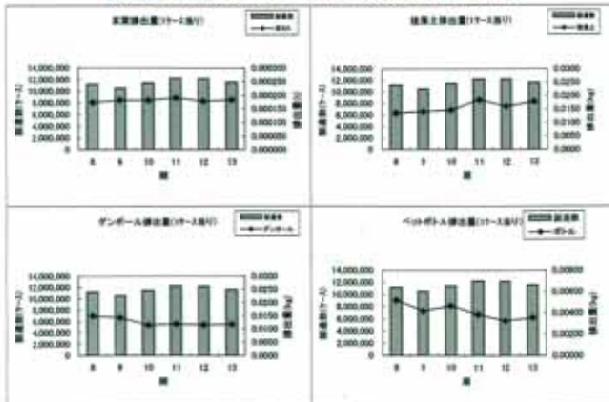
製造数量と原単位当たり使用量の推移



製造数量と原単位当たり排出量の推移(主な項目)



製造数量と原単位当たり排出量の推移(主な項目)



■環境保全効果

事業活動での直接・間接的環境負荷について、前年度同期と比較した
環境パフォーマンス(物量値)の改善を表すもの

インプット	原材料	副資材	包装材料																												
	エネルギー <table border="1"> <thead> <tr> <th>使用量</th> <th>前年比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>重油 4,603kl</td> <td>+8.6%</td> </tr> <tr> <td>電力 8,909,373kwh</td> <td>+3.8%</td> </tr> </tbody> </table>	使用量	前年比	重油 4,603kl	+8.6%	電力 8,909,373kwh	+3.8%	水資源 <table border="1"> <thead> <tr> <th>使用量</th> <th>前年比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>地下水 1,205,102m³</td> <td>+4.8%</td> </tr> </tbody> </table>	使用量	前年比	地下水 1,205,102m ³	+4.8%																			
使用量	前年比																														
重油 4,603kl	+8.6%																														
電力 8,909,373kwh	+3.8%																														
使用量	前年比																														
地下水 1,205,102m ³	+4.8%																														
エネルギーコストの削減及び節水対策として温排水再利用設備を導入しております。																															
製造	製品 (11,586,962c/s)																														
	CO₂、NO_x及びSO_x <table border="1"> <thead> <tr> <th>排出量</th> <th>前年比</th> <th>削減効果</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>CO₂ 15,840,400kg</td> <td>+7.5%</td> <td>-1,108,317kg</td> </tr> <tr> <td>NO_x 12,268kg</td> <td>+7.5%</td> <td>-860kg</td> </tr> <tr> <td>SO_x 6,981kg</td> <td>+8.6%</td> <td>-552kg</td> </tr> </tbody> </table>	排出量	前年比	削減効果	CO ₂ 15,840,400kg	+7.5%	-1,108,317kg	NO _x 12,268kg	+7.5%	-860kg	SO _x 6,981kg	+8.6%	-552kg	CO₂、NO_x及びSO_x <table border="1"> <thead> <tr> <th>排出量</th> <th>前年比</th> <th>削減効果</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>排水 1,077,845m³</td> <td>+5.1%</td> <td>-52,755m³</td> </tr> <tr> <td>水質汚濁物質 3,367kg</td> <td>-20.4%</td> <td>863kg</td> </tr> </tbody> </table>	排出量	前年比	削減効果	排水 1,077,845m ³	+5.1%	-52,755m ³	水質汚濁物質 3,367kg	-20.4%	863kg								
排出量	前年比	削減効果																													
CO ₂ 15,840,400kg	+7.5%	-1,108,317kg																													
NO _x 12,268kg	+7.5%	-860kg																													
SO _x 6,981kg	+8.6%	-552kg																													
排出量	前年比	削減効果																													
排水 1,077,845m ³	+5.1%	-52,755m ³																													
水質汚濁物質 3,367kg	-20.4%	863kg																													
アウトプット	廃棄物 <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">再資源化</th> <th colspan="2">非再資源化</th> </tr> <tr> <th>項目</th> <th>前年比</th> <th>項目</th> <th>前年比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>茶葉</td> <td>+3.3%</td> <td>珪藻土</td> <td>+11.5%</td> </tr> <tr> <td>ペットボトル</td> <td>+9.8%</td> <td>硬質樹脂容器</td> <td>-25.6%</td> </tr> <tr> <td>ダンボール</td> <td>+1.4%</td> <td>原材料</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>ドラム缶・ 一斗缶</td> <td>-25.6%</td> <td>フィルム状樹脂 PP/バンド</td> <td>+199.0%</td> </tr> <tr> <td>汚泥</td> <td>+132.5%</td> <td>紙類</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>			再資源化		非再資源化		項目	前年比	項目	前年比	茶葉	+3.3%	珪藻土	+11.5%	ペットボトル	+9.8%	硬質樹脂容器	-25.6%	ダンボール	+1.4%	原材料	-	ドラム缶・ 一斗缶	-25.6%	フィルム状樹脂 PP/バンド	+199.0%	汚泥	+132.5%	紙類	-
	再資源化		非再資源化																												
項目	前年比	項目	前年比																												
茶葉	+3.3%	珪藻土	+11.5%																												
ペットボトル	+9.8%	硬質樹脂容器	-25.6%																												
ダンボール	+1.4%	原材料	-																												
ドラム缶・ 一斗缶	-25.6%	フィルム状樹脂 PP/バンド	+199.0%																												
汚泥	+132.5%	紙類	-																												

注)

*1 前年比は原単位当りの値になります。

*2 削減効果は原単位あたりの削減量から算出しております。

*3 二酸化炭素換算値およびNO_x換算値につきましては、

2002年4月の環境省「環境活動評価プログラム」の係数を用いております。

*5 原材料(廃棄物)及び紙類、木パレット・木くずの前年比欄は前年該当期間に排出がなく
前年比を算出できないため記載しておりません。

*6 昨年度の11月よりフィルム状樹脂・PP/バンドを再資源化しています。

*7 今年度の8月より可燃物の一部を分別し紙類として再資源化しています。



■環境保全効果の金額換算

分類	金額(千円)
CO ₂ 排出量の削減	△ 10,474
NO _x 排出量の削減	△ 57
SO _x 排出量の削減	△ 28
合計	△ 10,559

注)

- *1 金額換算化係数は日本で各環境負荷量1トンを抑制するための費用により算出
- *2 CO₂=9,450円/トン京都議定書の目標達成のためのCO₂排出抑制費用(環境省試算値)
- *3 NO_x=66,315円/トン過去の環境負荷抑制費用の推定値より設定(旧経済企画庁の研究成果)
- *4 SO_x=50,159円/トン過去の環境負荷抑制費用の推定値より設定(旧経済企画庁の研究成果)

■企業内経済効果

分類	金額(千円)
事業場エネルギーの削減	27,618
廃棄物処理費用の削減	△ 4,074
地下水使用量の削減	198
調合液廃棄量の削減	2,562
合計	26,304

注)

- *1 事業場エネルギーの削減額は、自家発電装置導入による重油単価削減メリットを基に算出しております。
- *2 廃棄物処理費用の削減額は、各々のコスト単価と原単位あたりの削減量を基に算出しております。
- *3 地下水使用量の単価は36円/トンで計算しております。
- (旧経済企画庁の環境・経済統合勘定より)
- *4 調合液廃棄量の削減額は各々の原材料単価と廃棄量を基に算出しております。

環境報告
について



株式会社ハルナ品質環境研究所
執行役員 兼 品質環境本部本部長
古市 直也

ハルナビパレッジでは2003年度に初めて四半期報告会で環境会計を公表致しました。公表以来、環境負荷を低減するため環境委員会を中心として、省エネルギー対策や廃棄物の再資源化、減量化対策に取組んできました。

多品種・少量生産が今後更に増加していくと考えられますが引き続き省エネ・省資源の視点で生産プロセスの改善に取組む等、より一層の環境負荷の低減に全社一丸となって取組んでいきます。

また、今後は環境負荷の低減のみでなく環境にプラスとなる活動も行ない環境経営の実現に向けた取組みを進めていきたいと考えています。



具体的な取組み

■過去に取り組んだ環境に対する主な内容

環境方針の制定

経営の重要課題である環境問題に取組むため、企業理念に基づいて環境の基本理念を制定すると共に具体的な行動指針を定めました。

環境施設(緑地)面積の確保

工場立地法で定められている環境施設及び緑地面積を確保するための整備を実施しました。

排水処理施設の能力向上のための改修工事

廃棄物となる汚泥の排出量を削減するため第2排水処理施設の改修工事を実施しました。

排水処理施設汚泥量の削減効果

廃棄物となる汚泥の排出量を削減するため第2排水処理施設の改修工事を実施しました。

○対策効果／汚泥排出量：-53.7%
金額換算効果：914,057円

* 削減金額については、企業内経済効果の廃棄物処理費用削減項目に含む



廃棄物処理費用の見直し効果

ドラム缶、硬質樹脂(ラベル、キャップ)の処理費用の見直しを実施しました。

○対策効果／金額換算効果：893,334円

紙類の再資源化

2007年7月より可燃物として排出していた一部の紙類を分別排出することで再資源化しています。

引き続き廃棄物の再資源化に取組んでいきます。

排水処理施設汚泥量削減の推進

排水処理施設から廃棄物として排出される汚泥量を削減するため第1排水処理施設に汚泥減量化装置を導入しました。この装置は排水処理場で発生する有機汚泥を溶解するもので、排水処理施設での微生物の自己消化率を向上させ汚泥の排出量を削減します。現在本格稼動に向けて試運転を行なっています。



■代表者の社会貢献

当グループでは顧客思考を理念とし、研究・教育・社会貢献の推進にとりくんでいます。なかでも創業者であり、現在、グループ代表の青木清志は、経営者、起業家として、様々なステークホルダーとの交流を図るなか、地元大学や地元団体をはじめとする教育機関への講義、講演、委員として、社会貢献を積極的に行っております。起業経験を活かし、受講頂く皆様へ、夢や希望を育み、高い志と明確な目的意識を持って進む力を育てたいという意志の基、社会活動を行っています。

・群馬大学 社会情報学部 非常勤講師	「企業論」経営史学	平成13年4月～平成17年3月
・高崎経済大学 地域政策学部 特別講師	「ベンチャービジネス論」提供:日本政策投資銀行、野村證券	平成13年11月21日
・法政大学 大学院ビジネススクール経営学部 特別講師	「市場の発見」	平成14年6月15日
・群馬大学 大学院社会情報学研究科 特別講師	「企業・産業分析スキル」提供:野村證券	平成14年11月27日
・群馬大学 大学院社会情報学研究科 特別講師	「ビジネスプラン策定スキル」提供:野村證券	平成15年1月22日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成15年5月8日
・上武大学 ビジネス情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成16年5月21日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成16年5月12日
・法政大学 大学院社会情報学研究科講師	「起業家の決断」	平成16年5月19日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成17年5月11日
・上武大学 ビジネス情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成17年5月26日
・高崎経済大学 経済学部	大学と地場企業との連携講座「新しいビジネス戦略を求めて」	平成18年1月24日
・高崎経済大学 経済学部	大学と地場企業の連携講座「創出と現場力を考える」	平成18年2月23日
・法政大学 大学院ビジネススクール経営学部 特別講師	「企業家のビジョン」	平成18年5月10日
・上武大学 ビジネス情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成18年5月24日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成18年6月8日
・高崎経済大学 経済学部	「新地場産業としての飲料メーカーを創業して」	平成18年11月8日
・上武大学 ビジネス情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成19年5月16日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成19年5月24日
・群馬大学 共同研究イノベーションセンター 客員教授	「ビジネスと社会貢献」	平成19年11月8日
・群馬大学 共同研究イノベーションセンター 客員教授	「事業アイデアの創出と強化」	平成19年11月21日
・群馬大学 共同研究イノベーションセンター 客員教授	「組織構造とアライアンス」	平成19年12月6日
・群馬大学 共同研究イノベーションセンター 客員教授	「起業塾～循環の経営を考える～起業とは楽しいものです」	平成19年12月14日
・上武大学 ビジネス情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成20年5月21日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成20年5月22日

講 演

・新事業前出講演会	「起業家成長の鍵」	主催 群馬県中小企業振興公社	平成13年3月15日
・公開バーネルディスカッショն	「創業」	主催 高崎経済大学地域政策学部 高崎青年会議所	平成13年5月29日
・日本経済新聞金曜会	「私の経営理念」	主催 日本経済新聞前橋支局	平成13年9月7日
・シニアベンチャーセミナー	「創業のすすめ」	主催 商工労働部経営支援課	平成13年10月20.21日
・ぐんま・農業未来塾	「元気の出る経営戦略」	主催 群馬県農政部農政課	平成14年1月29日
・高齢者創業合宿セミナー	「創業」	主催 群馬県農政部農業開拓課	平成14年2月13日
・ぐんま・農業未来塾	「日本の農業の展望」	主催 群馬県農政部農政課	平成14年9月4日
・次世代産業創造戦略会議	「群馬環境構想」	主催 商工労働部産業政策課	平成14年10月29日
・就職支援セミナー＆ガイダンス	「働き方・生き方」革命	主催 商工労働部職業能力開発課	平成14年12月7日
・環境生活文化領域分科会	「環境事業の近未来」	主催 群馬県産業支援機構	平成15年4月22日
・高崎市青年団体連絡協議会	「元気が出来る経営」	主催 高崎青年会議所	平成17年5月18日
・高崎セントラルロータリークラブ	「知識製造業への変革」	主催 高崎セントラルロータリークラブ	平成18年3月14日
・関東商工会総会 基調講演	「経営概観」	主催 関東商工会	平成18年7月4日
・(株)NHKコンピューターサービス講演	「新規事業改革」	主催 (株)NHKコンピューターサービス	平成18年7月19日
・財団法人日本立地センター講演	「産業立地と地域再生」	主催 財団法人日本立地センター	平成18年11月9日

・群馬県商工労働部産業政策課 生活を豊かにする次世代産業創造懇親会議	コア会議委員
・地域研究開発促進拠点支援事業 環境生活文化領域分科会	委員
・北関東産官学研究会	顧問
・エコライフデザイン研究会	法人企業会員
・NPO法人北関東バイオフォーラム	会員
・高崎経済大学	非常勤講師
・国立大学法人群馬大学 共同研究イノベーションセンター	客員教授



■代表者の社会・広報活動

メディア

群馬テレビ	【ビジネスジャーナルビジネス夕】	平成 8年 8月16日放映
群馬テレビ	【ほしん元気情報】	平成13年 6月30日放映
群馬テレビ	【ぐんま with you】	平成13年 11月30日放映
群馬テレビ	【ニュースジャストエヌ 屋官共同研究発表】	平成15年 10月23日放映
群馬テレビ	【財部誠一の群馬元気情報】	平成15年 12月23日放映
群馬テレビ	【ひる生情報】野村のびっくあっこ企業探訪】	平成16年 5月30日放映
群馬テレビ	【ニュースジャストエヌ ピックアップ群馬】	平成17年 5月18日放映
群馬テレビ	【財部誠一の群馬の元気をバックアップ】	平成17年 12月21日放映
群馬テレビ	【ビジネスジャーナル ホットすぐらんまる】	平成19年 1月12日放映
群馬テレビ	【ニュースジャストエヌ タニガワピ(レッジ竣工式】	平成20年 3月27日放映

出版

・群馬経済ガイドブック	「キラリと光るユニーク企業」	平成11年10月23日号
・週刊ダイヤモンド	「10年後の売上高伸び率ランキング」	平成11年10月30日号
・月刊じょうほう	「株式公開を目指すボトル飲料メーカー」	平成12年 6月 5日号
・月刊ベンチャーリンク	「情報開示で他社に苦づ」	平成13年 7月15日号
・ビジネスプラザ	「私の経営」	平成14年12月13日号
・県内企業トップ7人の原点	「起業に年齢は関係ない」	平成15年 6月25日号
・商工たかさき	「ハルナビ/ハッジが創立10周年記念式典」	平成18年 3月15日号
・高崎セトモ-リーフア	「製造業への変革 企業価値を創造する人材育成」	平成18年 3月28日号
・商工たかさき	「今月の人 経営者像」	平成19年 1月15日号
・財団法人日本立地センター	「シニアベンチャーの経営戦略」	平成19年 5月 1日号

■ITシステム会議の実施によるペーパーレスの徹底

当社では、2006年1月より全社のIT化に着手し、社内で開催される会議は、原則として全てパソコン会議とすることとしました。全員がパソコンで会議することによって、社内でのペーパーレス化を徹底、環境にやさしい企業を目指しています。また、パソコン会議導入以前の会議では、会議で配布される資料には、顧客情報や財務情報など様々な重要データが混在する可能性がありました。会議をペーパーレス化することによって、それらの重要なデータは、ペーパー資料とすることなく、またアクセス制限を設けることなどによって、より適正に管理することができるようになりました。



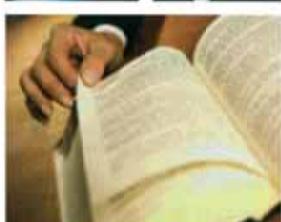
パソコン会議では、会議出席者は、特別なハードウエアを必要とせず、ソフトウェアのインストールだけでパソコン画面の転送を実現するだけです。



2年を経過し、今後はグループ全社間でのITシステムを強化し、ペーパーレス環境対策を広げていく計画です。

発注業務、基準書などの文書類から計画の進捗管理、記録、環境教育資料まで、EMS関連業務や書類をすべてインターネットで電子情報により運営・管理を目指します。

今後も、常に紙の使用量削減をめざし、電子情報化を徹底していく予定です。



企業の透明性の向上への取り組み

Harunabev. ShareHolder

■企業株主様(50音順)

朝日火災海上保険株式会社 様
糸井商事株式会社 様
鹿島エレクトロ産業株式会社 様
株式会社 足利銀行 様
株式会社 イズミフードマシナリ 様
株式会社 ウエストコーポレーション 様
株式会社 環境技研 様
株式会社 群成舎 様
株式会社 群馬銀行 様
株式会社 つかさフードサービス 様
株式会社 東和銀行 様
株式会社 トーモク 様
株式会社 八十二銀行 様
株式会社 ピバック 様
株式会社 フレッセイ 様
株式会社 プレーン 様
株式会社 モテキ 様
株式会社 安田商店 様
群栄化学工業 株式会社 様
サッポロ飲料 株式会社 様
サンセイ電設 株式会社 様

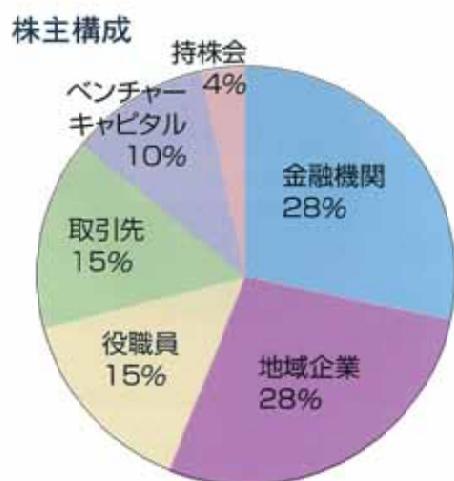
税理士法人合同会計 様
高信化学 株式会社 様
高橋税務経営事務所 様
中央群馬ホーム 株式会社 様
東京海上日動火災保険 株式会社 様
東芝三菱電機産業システム 株式会社 様
日産サティオ群馬 株式会社 様
日本生命保険相互会社 様
日本たばこ産業 株式会社 様
日本通運 株式会社 様
日本ベンチャーキャピタル 株式会社 様
八十二キャピタル 株式会社 様
株名直販 株式会社 様
株名酪農業協同組合連合会 様
細谷工業 株式会社 様
みずほキャピタル 株式会社 様
三菱商事 株式会社 様
三菱UFJキャピタル 株式会社 様
三菱UFJリース 株式会社 様
レンゴー 株式会社 様
和光化学株式会社 様

「パブリックカンパニーを目指して」

当社では、創業直後より将来の株式上場を見据えて資本政策を検討してまいりました。そのなかで、資本政策の根幹としましては、当社の理念にご賛同いただき、当社の成長発展をご支援してくださる皆様に、幅広く当社株式を保有していただくことでした。企業は多くの皆様のご支援とご協力のもとに成り立っているパブリックな存在であり、その皆様に株式を保有していただくことが、当社の社会的意義にもつながると認識しております。

その結果、現在では、お取引先様、金融機関様、地元の企業・個人様および当社の役職員を中心に、95名の株主の皆様に、当社株式を保有していただいております。

当社としましては、多数の株主の皆様に株式を保有していただいていることに大変感謝し、株主の皆様の利益に十分に配慮するとともに、企業の成長発展と社会貢献に尽力してまいります。



■四半期報告会

当社では、2002年8月より継続して、四半期報告会を開催しています。

四半期報告会では、主として当社の四半期ベースでの業績を報告していますが、

その中では、財務情報のみならず、販売動向、製造効率や製造ロスの状況、品質情報、環境会計などのデータを全て報告し、株主の皆様や取引先金融機関の皆様に、当社の業況をより深くご理解いただくための内容としています。報告は、各部門の責任者が資料をもとに、直接口頭で説明させていただくので、その責任者に自分の業務についてより深く考えてもらう、そういう人材教育としての側面も、四半期報告会の意義として併せ持っています。

今後は、グループ全体としての連結経営体制がより重視されることから、各社の業況を

より分かりやすく説明させていただくことと、連結決算処理の短期化など業務改善を目指してまいります。

第13期 第3四半期報告会 ハルナビバレッジ株式会社

日 時：平成20年2月6日（水曜日）午前10時
場 所：ホテルメトロポリタン 6F 白鷺の間

一、開会宣言

二、第3四半期報告

- 1) 業績概況報告
- 2) 営業報告
- 3) 生産報告
- 4) 品質・環境報告
- 5) 総括報告

三、タニガワビバレッジ株式会社現況報告

四、ハルナグループ経営政策について

五、質疑応答

六、閉会宣言

当日はお取引金融機関様、株主様
地元企業様、報道関係者様
31社43名の方々にご参加を頂きました。



リスク管理体制

企業運営にあたっては、様々なリスクが生じる可能性があります。主要なものとしては、経営リスク、営業・販売リスク、製造・品質リスク、安全に対するリスク、環境に対するリスク等が挙げられます。当社としては、これらのリスクに対処していくためリスク管理規定を設定し、万一リスクが発生した場合、適切な委員会および会議で対応を協議し対策の意思決定をおこなうこととしています。そして、全ての委員会および会議において、パブリックカンパニーとしてコンプライアンスを徹底しています。

■リスク管理に対しての委員会及び会議等の設置内容

■グループ経営政策委員会

当社グループ全体の重要な政策を協議すると同時に、経営上重要なリスクが発生した場合の対処方針を協議する委員会です。グループ各社の代表取締役全員が委員となっており、経営危機管理規定に想定するような事態が発生した場合、緊急の対策本部ともなります。

■グループ経営監査委員会

当社グループ全体の内部統制が有効に機能しているかを監査する委員会で、会社法による内部統制の観点から、内部統制を監査します。併せて、経営上重要なコンプライアンスの問題について協議し、グループとしての対処方針を提言していく委員会です。監査役及び経営監視役が全員、構成メンバーとなっています。

■執行会議

当社グループの各会社において、執行上の重要な意思を決定し、リスクに対する会議として、各部門の責任者が全員出席し、原則週1回開催される会議です。開発、営業、生産、品質、物流など業務執行に関わる重要事項は全て報告および検討され、当社としての意思決定を行っていきます。

■HACCP委員会

当社では、平成18年9月に総合衛生管理製造過程(HACCP)が認可承認されました。当社の品質および衛生管理は、全てHACCPの理念および基準に基づくものとしており、本委員会は、総合衛生管理システム維持向上のための組織として、原則月1回開催され、品質および衛生管理の状況を確認するとともに、重要な意思決定を担っています。

■品質会議

HACCP委員会の下部委員会として、品質に係わるより詳細な対策内容の決定や検証についての打合せを行う会議です。品質上、重要な問題が発生した場合には、本会議にて協議することとなっております。

■安全衛生委員会

工場内外での業務活動における安全を確保するために、原則月1回開催され、安全を確保するためのパトロール、危険への事前対処および社員への意識付けを目的としています。

■環境委員会

当社が地域環境保全に問題を生じさせることなく、どのような貢献ができるかについて、協議する委員会で、原則月1回開催されます。各種環境データーを検証し、環境への対応について協議しています。

社員育成への取り組み

2005年4月ビジネススクールの開校から三年間の講座内容

平成17年度 公開講座 合計22講座 受講人数 約837名		平成18年度 公開講座 合計18講座 受講人数 約561名		平成19年度 アントレプレナーシップコース 合計15講座 受講人数 延べ400名	
群馬大学 社会情報学部 田村 勇志 教授	・ネットワーク組織論(1) (地図情報とその連結)	九紅マシナリー(株) 元社長 森田 茂 様	・自己意識改革と自己実現	経済ジャーナリスト 財部誠一様	講者の思考 いい仕事をしていい人生を送るために
	・ネットワーク組織論(2) (変容する社会と企業)	人材形成研究所 所長 水上 久忠 様	・会社を活性化させるためには 何が必要か?	カゴメ(株) ユニットディレクター 杉山重久雄様	植物性乳酸菌飲料ラブレーについて
	・ネットワーク組織論(総括編)		・人材形成戦略	群馬大学 共同研究 イノベーション センター 教授 須賀勝樹	イノベーション経営改革を
三菱商事(株) 元産業機械本部長 佐野 邦八郎 様	・経験からのメッセージ 製造業の重要性(1)	群馬大学社会 情報学部 教授 田村 勇志 様	・ナレッジマネージメント入門(1) (知識創造企業を目指す経営学)		ものづくり今・未来
	・経験からのメッセージ 製造業の重要性(2)		・ナレッジマネージメント入門(2) (知識創造企業を目指す経営学)		プロジェクト活動でイノベーションを
	・経験からのメッセージ 製造業の重要性(3)	毎日新聞社 論説委員 岸井 雄作 様	・中小企業の生きる道、活動への期待 (大企業との役割分担)	法政大学 経営学部 教授 松島茂樹	企業家のビジョン 瀬沼技評、昭和製作所のケース
法政大学 経営学部 松島 茂 教授	・競争力の源泉(1) 事業システムの構想力	三菱商事(株) 元産業機械本部長 佐野 邦八郎 様	・米国飲料業界に学ぶ (1年間留学経験紹介)		組織の中のアントレプレナーシップ
	・競争力の源泉(2) なぜトヨタはフォードに勝ったのか	法政大学 経営学部教授 松島 茂 様	・課題の事例研究(1) (ハルナビ(ハレッジグループの ケース・スタディー))	サッポロ飲料(株) 元代表取締役社長 岡田明樹	これから会社はどうあるべきか
	・競争力の源泉(3) 経営資源		・課題の事例研究(2) (ハルナビ(ハレッジグループの ケース・スタディー))	群馬大学 社会情報学部 教授 田村勇志様	日常業務における「場」のセッティング と知識伝承について
	・競争力の源泉(4) 企業の成長と アントレプレナーシップ	群馬県農業支援機構 専務理事 長谷川 幸彦 様	・経営の創造性を高める ～元気企業に学ぶ経営革新の暗黙点～	ヨークマート(株) 元代表取締役社長 杉井一郎様	小売業からみたお客様
高崎健康福祉大学 健康福祉学部 江口 文隆 教授	・産官学提携の重要性とその実践		・ケーススタディ ～自社の強み・弱み分析からの 経営革新の方向付け～	中央総合学院グループ 学院長 後藤 新 様	人づくり・組織づくり
	・きのこに学ぶ変化する社会への対応	群馬大学 地域共同研究センター 須賀 喜 教授			グループ経営とアライアンス戦略
サッポロ飲料(株) 社長 岡 俊明 様	・市場環境変化とマーケティング	群馬大学 地域共同研究センター 教授 須賀 喜 様	・技術者が修得すべき技術開発経営	ハルナグループ 代表CEO 青木清志	強い企業の実現に向って +αが成功の基
群馬大学 地域共同研究センター 須賀 喜 教授	・物語り技術の伝統を持とう	ナッポロビール飲料(株) 前社長 岡 俊明 様	・企業とグローバル化		ハルナグループの将来構想(2) 経営者の時代
	・環境にやさしいエネルギー		・企業免査に向け今求められること		
高崎経済大学 経済学部 岸田 孝志 教授	・企業のリスクマネジメントと 安全文化・安全風土	高崎経済大学 経済学部教授 岸田 孝志 様	・作業者の作業意欲と動機付け		
毎日新聞社 経済部編集委員 岸井 雄作 様	・町工場を教材して ～ものづくりの現場で見た課題		・参加型人間工学と改善		
群馬県農業支援機構 専務理事 長谷川 幸彦 様	・群馬県の産業構造の特徴と課題 ～これまでとこれから～	高崎健康福祉大学 健康福祉学部 教授 江口 文隆 様	・産学連携のケース・スタディー		
人材形成研究所 水上 久忠 様	・管理者の人材形成	経済ジャーナリスト 財部 誠一様	ハルナグループ代表 CEO青木との会談～経営論～		
カゴメ(株) 横田 哲也 部長 様 末田 司 副部長 様	・野菜と健康				
(株)ハルナビ(ハレッジ) 研究所 監査役 小林欣司	・創業者から学んだもの				
ハルナビ(ハレッジ)(株) 代表取締役社長 青木 清志	・新しい時代への製造業構想				



Haruna Group ビジネススクール ~講座内容~

平成20年度「製造者養成ハルナビジネススクール」

「企業価値を創造する人材育成」を目的に設立された製造者養成ビジネススクールも3年を経過いたしました。この3年間の経験を踏まえ、又、今年1月よりタニガワビバレッジ株式会社もハルナグループの仲間に加わり、ますますグループ経営の重要性も増したことから、平成20年度のビジネススクールを次のように運営していきます。青木清志ハルナグループ代表取締役会長が言及されているグループ経営のコンセプト『これまでのグループ集合体に近い実態から、連結経営体制による「ハルナビジョン」の基で、「コーポレートブランド」価値の最大化を目指すには、戦略性をもつ組織構造に変革する必要がある』を実現するために、本年は特にエグゼクティブコースを設け、充実化を図ります。また、ミドルマネージメントコース、プライマリーコース、タニガワビバレッジコースの3コースで、グループ社員全員のレベルアップを目指します。

1. エグゼクティブコース 特別講座

受講対象者：ハルナグループ各企業のトップ経営陣（指名）

研修時間：年6回、原則として隔月1回、月曜日 18:00～19:40 研修期間は、2～3年での完結を目指す

講座内容：青木会長を座長としたゼミナル形式 その他に、ビジネススクールの客員教授1人も講師としての参加を仰ぐ

スケジュール・カリキュラム・講師：

4月 7日(月) 青木会長『グループ経営とアライアンス戦略』
6月16日(月) 青木会長
『グループ経営のための戦略①』
10月 6日(月) 青木会長、岡俊明 元サッポロ飲料株社長
『グループ経営のための戦略②』

12月15日(月) 青木会長、須齋嵩 群馬大教授
『グループ経営のための戦略③』
2月 2日(月) 青木会長、財部誠一 経済ジャーナリスト
『グループ経営のための戦略④』
3月16日(月) 青木会長『グループ経営のための戦略⑤』

2. エグゼクティブコース 通常講座

受講対象者：ハルナグループ企業の幹部（自由参加）

研修時間 毎月第一月曜日、第三月曜日 18:00～19:40

講座内容 ビジネススクール教授陣による講座（ゼミ形式、講義方式）2年～3年間のスパンでの終了を目指す、
体系的に、ファイナンシャルマネージメント、マーケティング論、組織行動学、経営総論を学ぶ

スケジュールとカリキュラム：

4月21日(月) キリンビールラガーの生ビール化 松島 茂 東京理科大学大学院教授
5月 7日(水) 投資経済分析 寺石 雅英 群馬大学教授
5月19日(月) 企業価値評価 寺石 雅英 群馬大学教授
6月 2日(月) 飲料・食品業界に於ける市場変化と消費動向
岡 俊明 サッポロ飲料株元社長
7月 7日(月) 技術開発と技術経営 須齋 嵩 群馬大学教授
7月22日(月) 財務分析① 小出 信介 ハルナビバレッジ株社長
8月 4日(月) 人づくり組織づくりⅠ 後藤 新 中央総合学院グループ学院長
8月18日(月) 財務分析② 小出 信介 ハルナビバレッジ株社長
9月 1日(月) コストダウン(コスト開発力) 须齋嵩 群馬大学教授
9月16日(月) 米国飲料業界に学ぶ① 佐野 昭八郎 三菱商事株元産業機械本部長
10月20日(月) アサヒビール長期低迷企業の再生 松島 茂 東京理科大学大学院教授
11月 4日(火) 企業の成功例・失敗例Ⅰ 杉 伸一郎 ヨークマート株元社長
11月17日(月) 経営情報システム論(最新システムの事例分析)Ⅰ
田村 泰彦 群馬大学教授
12月 1日(月) 経営情報システム論(最新システムの事例分析)Ⅱ
田村 泰彦 群馬大学教
1月 7日(水) 企業の成功例・失敗例Ⅱ 杉 伸一郎 ヨークマート株元社長
1月19日(月) 人づくり組織づくりⅡ 後藤 新 中央総合学院グループ学院長
2月16日(月) 飲料・食品業界に於けるこれから求められる商品とのづくりの視点
岡 俊明 サッポロ飲料株元社長
3月 2日(月) 米国飲料業界に学ぶ② 佐野 昭八郎 三菱商事株元産業機械本部長



3. エグゼクティブコース ウィンタースクール

受講対象者: ハルナグループ各企業の幹部(指名)

研修時間: 11月22日(土) 9:30~18:30 一泊二日 合宿研修 11月23日(日) 6:30~10:00

研修場所: 音羽俱楽部(前橋市神沢の森)

講師&カリキュラム: 後日決定

4. ミドルマネージメントコース

受講対象者: ハルナグループ各企業(除. タニガワビバレッジ株)の部長職(STL) 課長職(TL)の全員(指名)

研修時間: 月1回とし、早番最後の日の17:30~19:00 同一講義を月に3回行う。詳細の日程は毎月決定する

スケジュールとカリキュラム:

4月 清涼飲料製造工程での重要管理項目 菅谷 経営監視評価役

5月 物の見方・考え方 跡田 潔 ハルナビバレッジ研究所元社長

6月 管理の基礎について 跡田 潔 ハルナビバレッジ研究所元社長

7月 IEの基礎 菅谷 経営監視評価役

8月 食品衛生法について 跡田 潔 ハルナビバレッジ研究所元社長

9月 管理者のコミュニケーション力の高め方 菅谷 経営監視評価役

10月 財務分析 小出代表取締役社長

11月 会社法、労働法、コンプライアンス 小林 経営監視評価役

12月 マーケティングの重要性について 青木 常務取締役

1月 生産の五要素について① 跡田 潔 ハルナビバレッジ研究所元社長

2月 清涼飲料製造用資材の基礎知識 菅谷 経営監視評価役

3月 生産の五要素について② 跡田 潔 ハルナビバレッジ研究所元社長

5. プライマリーコース

受講対象者: ハルナビバレッジ株、ハルナビバレッジ研究所のチームリーダー以下の全社員

研修時間: 月1回とし、連休明けの遅番最初の日に、一時間早出16:00~17:00 同一講義を月に3回行う。

製造本部以外は、業務の合間に、いずれかの時間で講義を受ける。毎月の日程は、

第一・第二・第三工場年間出勤カレンダーに基づいて決定する

スケジュールとカリキュラム:

4月 清涼飲料製造の基礎知識:調合～充填～包装までの流れ 三原 製造本部長

5月 同上 :微生物汚染と殺菌 古市 品質保証本部長

6月 安全衛生について 荒井 HLC統括部長

7月 製造現場での安全衛生:熱中症の危険性、予防策、発生時対処、救護法について
三原 製造本部長

8月 清涼飲料製造の基礎知識:サニテーションと衛生管理(CIPを含む)

青木 生産管理部長

9月 清涼飲料製造の基礎知識:飲料関係法令(食品衛生法、排水・廃棄物等)

古市 品質保証本部長

10月 機会保全の基本 湯浅 工務部GL

11月 電気の基礎知識 清水 製造副本部長

12月 作業改善の方法(QC7つ道具説明含む) 岩井 品質保証副本部長

1月 トラブル事例研究①(ケアレスミス防止方法含む) 小林 第一工場長

2月 同上 ②(同上) 石原 第二工場長

3月 飲料マーケットとHBグループの今後 青木 常務取締役

6. タニガワビバレッジコース

受講対象者: タニガワビバレッジ株全社員

研修時間: 交代制勤務のため、同一講義を月3回実施する日時は毎月勤務状況に応じてその都度決定する

講座内容: 近い将来、HACCP認証工場取得に向けての全員研修の必要科目

講師: 跡田 潔 株ハルナビバレッジ研究所元社長

スケジュールとカリキュラム:

5月 会議について(コミュニケーションの重要性)

11月 HACCPシステムとは何か

6月 物の見方、考え方について

12月 清涼飲料水の微生物等の制御

7月 食品衛生法について

1月 清涼飲料水の一般的衛生管理

8月 HACCP(総合衛生管理製造過程について)

2月 HACCPプラン導入の手順

9月 清涼飲料水とは 種類と分類

3月 総合衛生管理製造過程の承認申請と承認の更新

10月 食品衛生の基本的な知識

Haruna Group ビジネススクール エグゼクティブコース

次年度のカルキュラム編成のために諸先生方にお集まり頂きスクールの今後の方針を相談させて頂く[教授会]を開催しています。本年度の諸先生方は下記のとおりです。

注)2008年開講順で表記させて頂いています。



経済政策シンクタンク「ハイペイロード・ジャパン」代表 経済ジャーナリスト
財部 誠一 先生

フリーランスジャーナリストの財部誠一先生。金融、経済誌に多く寄稿され、気鋭のジャーナリストとして期待される先生です。現在はテレビ朝日系の情報番組「サンテープロジェクト」、BS日テレ「財部ビジネス研究所」、大阪・朝日放送「ムーブ」等、TVやラジオでも活躍中で、経済界の政策提言もされていらっしゃる財部先生をお迎えし、現代市場を背景に変動する経済・経営・金融等、ご教示頂きます。



東京理科大学大学院
総合科学技術経営研究科教授
松島 茂 先生

松島先生の専門は企業家活動論、中小企業論。研究テーマは、産業集積のメカニズムとダイナミクス、中小企業政策の生成と展開、経済産業省、南東アジア大洋州課長、中小企業庁計画課長、大臣官房企画室長、工業技術院審議官、中部通商産業局長を歴任された経験から日本企業のあり方、中小企業の政策を事例をあげて分かりやすくご講義頂いています。今期はケーススタディ「キリンビールラガーの生ビール化と歴史的逆転」「アサヒビールー長期低迷企業の再生」をご指導頂きます。



群馬大学
社会情報学部教授
寺石 雅英 先生

寺石先生の専門はファイナンス論、起業論、交渉論。大学では「経営学」「ファイナンス論」「ベンチャー創造の人間学」「必勝法の経済心理学」「エンタテインメントの経営学」、大学院では「企業・産業分析スキル」「ビジネスプラン策定スキル」「企業再生マネジメント」「技術・知的財産マネジメント」「旅館・ホテル経営論」等の広範囲の専門の先生です。当社では今期よりご講義頂きます。「財務分析・投資・経済分析・企業価値評価・意思決定バイアス」をご指導頂きます。



元サッポロ飲料(株)
代表取締役社長
岡 俊明 先生

サッポロ飲料(株)代表取締役社長のご経験から経営者には努力だけではなく、培われた経営センスやマーケティング力が必要であるとの観点から、飲料食品業界に於ける「市場変化と消費動向、飲料食品業界に於けるこれから求められる商品とのづくり飲料食品業界に於ける売りの仕組みづくりとプロモーション戦略」をご指導頂きます。



群馬大学
社会情報学部教授
田村 泰彦 先生

群馬大学社会情報学部の教授、田村先生は「日本企業は組織的知識創造の技術・技術によって成功してきた。組織的知識創造とは新しい知識を創りだし、組織全体に広め製品やサービスあるいは新規システムに具体化する組織全体の能力のことであるそれが日本企業成功の根本的原因である。」と日本経営面から情報学と幅広い知識からご指導を頂いています。また、当社ハルナビパレッジ株式会社の監査役員で、当社取締役のご指導も頂いています。今期の田村先生のご講義は「経営情報システム論—基幹システムの事例分析ー」と事務をあげてご講義をしていただきます。



中央総合学院グループ
学院長
黒田 新 先生

群馬県の出納長のご経験もある黒田先生は、現在は群馬県内でも最大の中央総合学院グループの学院長でいらっしゃいます。ウインタースクールのご講義でも「人づくり組織づくり」と題し、組織は目的を明確にすること。全員がモチベーションを持つことは難しいことであるが、核となる人間を見出し、委ねるべきは委ね責任は自分でとるという考え方で、人を育てることが重要である。とご指導頂きました。



群馬大学
共同研究イノベーションセンター教授
(兼)研究・知的財産戦略本部副本部長
須賀 崑 先生

現在群馬大学共同研究イノベーションセンター教授でいらっしゃる須賀先生は、企業勤務時は開発から海外販売まで、事業経営責任者や中国に会社を設立し、董事長を務められ、また海外工場や販売拠点を創設・環境・エネルギー研究所の設立と同時に研究所の責任者等を歴任された経験もあり豊富な知識より、今期は技術経営論コスト開発(コスト削減)問題解決能力をご指導頂きます。



元三菱商事(株)
産業機械本部長
佐野 昭八郎 先生

三菱商事では機械グループに所属し終始機械設備の販売を担当されていらっしゃいました。ご退職後富士コカコーラ社入社され、米国コカコーラ社で研修を受けられたご経験もある佐野先生。今回のご講義はこの研修のご体験を中心に、三菱商事ニューヨーク駐在員時代、富士コカコーラ社時代のご経験、また米国飲料業界の市場もご教示頂きます。



元ヨークマート(株)
代表取締役社長
杉 伸一郎 先生

元ヨークマート(株)代表取締役社長の杉先生は、ご経験と知識を生かし、現在、食品流通研究会代表でいらっしゃいます。経営流通のプロフェッショナルである杉先生は「今、経営理念の違う小売業態が必要。利益が出ないビジネスは、意味がない。過疎地で成り立つ業態がある。それには日常にこだわること。非日常を排除すること」と教えて頂きました。今期よりご講義を頂き「企業の成功例失敗例」を示唆に富むご講義を頂きます。



元(株)ハルナビパレッジ研究所
代表取締役社長
鈴木 潔 先生

今期では、「管理の基礎について・物の見方考え方について・生産の5要素について」を担当して頂く。ハルナビパレッジ創業から社員を見ている鈴木先生から「当社社員は眞面目ではあるが、積極性に欠ける面がある。アントレプレナーを主として考えたときには、もっと視野を広げ外部との接触が必要」との見解を反映された管理・考え方をご指導頂きます。

Haruna Group ビジネススクール ウィンタースクール

当ビジネススクールではアントレプレナーシップ講座『ウィンタースクール』を実施、講師の先生方をお招きして1泊2日の合宿を行っています。

5名の講師をお招きしセミナーを開講、社会情報学・社会工学・物流、経営・財務知識等のアントレプレナーシップのご講義を1日間受け、講義後は、先生方を含め代表者、役員、幹部が全てアトランダムに設定されたグループに分けられ、ひとつのテーマ、「ハルナグループの強さと弱さ」で会食をしながら話し合いを行いました。また食事後は、先生方、役員を囲んで、相談をしたり将来の希望を、語り合う場所を設けました。翌朝はホテルの庭に集まり、エクササイズを行いました。1泊2日間の参加で、社外の先生方からの講義だけではなく、役員と会社の将来を語り合い等のふれあいの時間を作り、社員の意識改革、自己啓発につながるスクールを実施しています。

～参加者の感想～

○合宿形式で行われた設定は通常の講座以上に「集中」して学べる環境であったと思われます。特に製造本部所属の人間はいつも制服のまま出席している等、仕事の延長気分でありがちであるが、休日の合宿で終日を勉強の時間に費やすことは、それらの雑念が介在せず学ぶ場として参加することが出来ました。

○週末の貴重な時間をこのような講義を設定して頂き誠に嬉しいです。今回感じたことは日々の業務に追いまくられ見落としがちなポイントを多数指摘を受けたと感じます。

○業務改善に取り組む人々の思い・信念には感銘を受けました。何かをやり続ける継続性と広い視野をもつ重要性を感じられました。日々目の前の課題に取り組むと共に、これらのどれかひとつでも身につけたいと感じています。

○青木会長からの皆さんには会社にとって、人的資本であり、資本には運用が高められていきます。人間として個人を高め、磨きをかけると反射鏡となりそこから発せられた光がステークホルダーに働きかけて、その力が評価され企業に跳ね返り企業価値を高めていくことになるとお話を聞きました。

○田村教授のご講義は基本的に「場」について客観的に考察して行動していませんでしたので大変参考になりました。今後は「場」と伝承について考えて行動したいと思います。

○小売業の最前線に立れた杉先生のお話はとても新鮮なものでした。特にPOSデータに頼りすぎる経営の危険さの件は興味を引かれた。

○須齊先生のご講義は、色々幅広くお話を頂き毎回楽しみにしていますが、今回は特に広範囲にわたる様々な業界の話を頂き、大変楽しい講義でした。携帯事業の海外戦略、後発生優位の話、後進国の同質化の話や先進国は技術革新により異質化を図ること。またプロジェクト活動の話ではリーダーの役割としてNavigatorネットワーク交渉など様々な話を頂き参考になりました。

○情熱、信念、知恵、コミュニケーション、チームワーク、オリジナル技術、市場分析、チャレンジ等、会社発展に必要な全てが網羅された講義内容がありました。

○ウインタースクールを受講して、一番よかったですと感じたことは各セッションの講義も良かったのですが、コミュニケーションアワー以降の参加者が就寝するまでの間に自由に語り合う時間があったことです。

○後藤先生は群馬県の出納長という要職にあられた方で、部下のモチベーションをアップさせるにはどうしたらよいのかなどという苦労なお話、またご自身のご苦労をされた近況もジョークを交えてお話をされて大変勉強になりました。

○松島教授のご講話は過去の成功例を題材にされ具体的な内容であるからこそ強い刺激を覚えました。受講後事例企業の本を取り寄せ読んでみました。その位講義が面白かったといえば、失礼かもしれません、とても参考になりました。

○エクササイズアワーでは青木会長のご指導のもと早朝よりエクササイズを行い気持ちの良い朝を向えられました。

○今回のようなスクールでは始めての経験で各社の仲間達と交流が持てて非常に有意義な時間を過ごす事が出来ました。日頃感じない緊張感と新鮮さは気の充実につながりました。ありがとうございました。



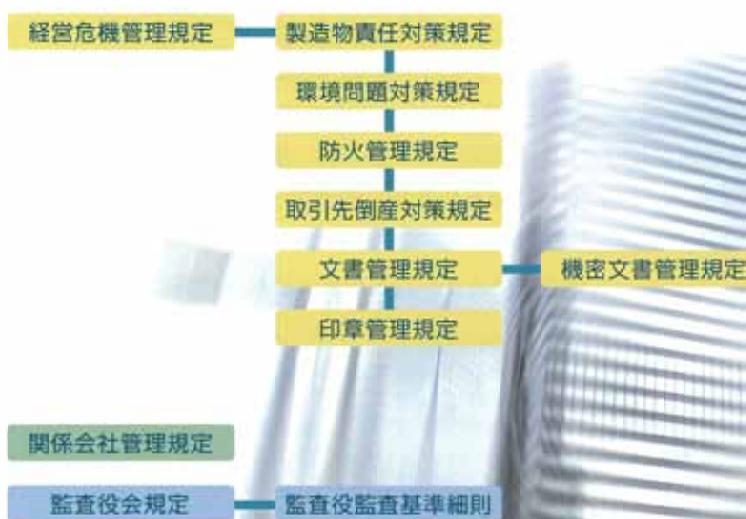
ハルナビビジネススクール 理事構成

校長 小出 信介(ハルナビバレッジ代表取締役社長)

理事長 青木 满志(グループ代表 CEO)
副理事長 菅谷 重信(ハルナビバレッジ経営監査評価役)
専務理事 小林 欣司(ハルナビバレッジ経営監査評価役)

Haruna Group 社員育成:自己啓発

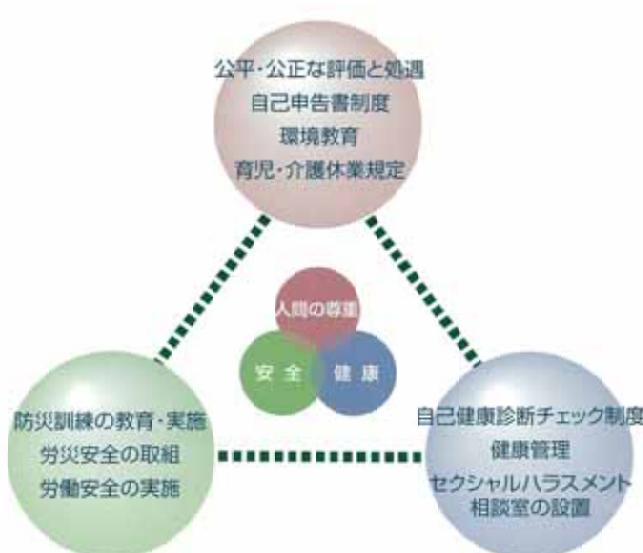
当社では、役員・社員へのコンプライアンスの徹底を図っております。



当社は社員一人ひとりの個性と意欲を尊重し、社員とともに成長していく企業をめざしています。

そのために公正で働きやすく、健康と安全に配慮した職場環境の整備に努めています。

また、社員の健康づくりや能力開発を支援するさまざまな施策を展開しています。



ハルナインテリジェンスネットワーク株式会社
広報・秘書チーム室長
黒澤厚美

ハルナグループのコーポレートガバナンス基本方針である「価値ある企業」とは、信頼され続ける事から始まると言は考えています。法令遵守だけではなく、皆様からの信頼を得て、期待に応えられる企業価値の向上と経営品質の向上を目指しながら、社会的責任を果たしていきたいと望んでいます。現在では、コンプライアンスに係わる体制の構築に努力をしていますが、企業価値の創造の基盤には、働く社員の一人一人が、会社の理念や倫理に共感し、参画意識を持ち、会社と社員の間での信頼が、重要になると思います。そのためには、人権の尊重・安全で快適な職場づくり・社員は健全な心身を持つことは不可欠であり、その中で生まれる信頼や、社員の志しが、将来の大きな支えとなり「価値ある企業」として支持され続けていくと考えています。

Employee Stocks Society/Employee Stock Options

■従業員持株会

当社では、社員の経営参画意識を高め、また社員の将来的な財産形成にも寄与するとの理念から、1997年より従業員持株会制度を導入しています。経営に参画する役職員が、自社株式を保有し、自社の企業価値を高めることにより高い意識を有することにより、当社の企業価値の向上と株主の皆様全体の利益の向上が達成されることを目的としています。

持株会に参加している役職員は、毎月の給与から一定額を天引きにより積み立て、その積立額に応じて当社が奨励金を給付しています。

持株会の会員は設立当初より増加傾向をたどり、現在では、会員数が67名となり、役職員全体の46.2%となります。

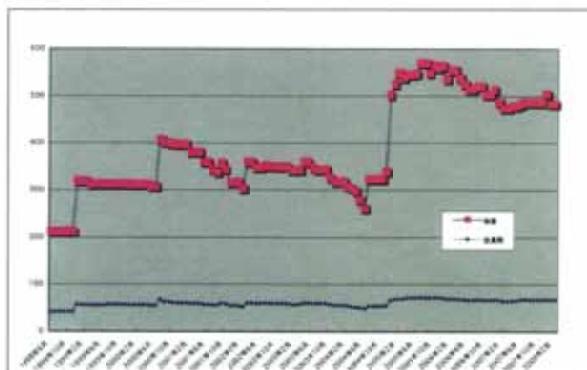
■ストックオプション

当社では、従業員持株会と同様の趣旨から、ストックオプション制度を導入しています。ストックオプションについても、役職員の経営参画意識を高めていくという視点から、経営トップから現場の責任者まで、幅広く付与することとしました。

現場の責任者まで付与することにより、より積極的に自社の企業価値を高めることについて、自ら考え、実行することを期待しています。

ストックオプションは、第12期定時株主総会で導入され、付与者は96名、役職員全体の66.2%となります。

従業員持株会会員数と株数の推移 1998年6月～2008年2月



社員からの意見

愛社精神、モチベーションが高まりました。会社のために努力し業績を上げれば、自分の持っている自社株が上がっていくので、必然的に自分の財産も増えしていくことになります。会社のために努力するということは愛社精神につながります。

経営参画意識が高まってきた

現在、当社は2010年の株式上場に向け、
役員・社員一丸となり、
とりくみを行っております。





編集にあたって

当社ハルナグループのCSR(企業の社会的責任)と、それを果たすための取り組みについて基本的な考え方と実績、今後の計画を報告するものです。編集にあたっては、各ステークホルダーの皆様からの関心が高いと思われることハルナグループが力を入れていることに焦点をあてて報告しています。重要なテーマである「ものづくり」「環境」「人」については特集ページを設け考え方や施策について理解していただきやすいようにしました。各ステークホルダーの皆様との対話を深めるために第三者の方から本報告書に対するご意見をいただき、掲載しています。

2008年6月26日

ハルナグループ
ハルナビバレッジ株式会社
CSR推進室

